

琉球大学学術リポジトリ

詠み歌琉歌の基礎的研究 『琉球新報』 『沖縄毎日新聞』 に掲載された大正期の琉歌

メタデータ	言語: 出版者: 前城淳子 公開日: 2009-06-12 キーワード (Ja): 琉歌, 詠み歌, データベース, データベース化, 節組琉歌集 キーワード (En): 作成者: 前城, 淳子, Maeshiro, junko メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/10907

大正三年二月二日付「新報」第四九四二号

三六会

恋人事

兼題

点者當銘朝頼大人

仁

稻嶺盛治

義理頼て渡る浮世しりなけなふみまゆて行き恋の習や

義

勝連貞

よせららぬことにごとていくものや恋のみちすしのひとつさら

め

礼

浦添朝長

浮名立波に袖やぬれながらあさましや恋路迷て行き

智

高江洲昌壯

若さから老の坂のほるまでもわすららぬものや恋路さらめ

信

勝連貞

恋しのふ事や誰もあるならへ義理の道筋にたかぬかきり

秀

花城朝忠

浮世あた波もたためことわ身のやそやそと漕さ恋の小舟

秀

翁長良才

浮世何事も習取てどしゆるな胸ゆしちしゆす恋路さらめ

秀

高嶺松亭

肝しきも戻ちいさめてもわ身のふみ迷て入ゆさ恋の山路

追吟

山をのくほとどの武士の身ゆやてもせおひかたなさや恋のおもね

触物催恋

兼題

當銘朝頼大人撰

仁

花城朝忠

新西ふく風の身にせめる夜やかかわて思ましゆさかなしお側

義

大宜見朝隆

嵐吹く夜やかかわておひちやしゆさむかし袖合れたる無蔵か情け

礼

大宜見朝隆

はた寒くなれはおひちやしゆさ昔むつれたる無蔵か磯の住家

智

浦添朝長

月の夜になればあいちをられらぬ面影とつれて忍でいちゆさ

信

勝連貞

てる月のかけも咲く花のいろも恋の物思の種子となゆる

秀

嵩原松亭

花の匂すゆる蝶見ち我身もこころうかされて忍でいちゆさ

秀

神山處如

ゆき過る無蔵か袖のうつり香や衾れ物思の種子になゆる

秀

高江洲昌壯

月にしらへよる琴の音よ聞は話ておみましゆさ無蔵かお側

秀

稻嶺盛治

夜半に松虫のしめしめと鳴は恋しおも影のまさて立ゆさ

追吟

月見しち思ひわすらていすればよくとてりまさるあれかすかた

追吟

新西ふく風の音の身にせめてつめて恋しさや無蔵かお側

大正三年二月二八日付「新報」第四九四八号

三六会

大正三年三月一二日付「新報」第四九六〇号

三六会

二月

松契多春 兼題

當銘朝穎大人

仁

稻嶺盛治

幾千とし春と契りしち松のとしことに枝葉さかて行ちゆさ

義

翁長良才

千代八千代かけて契りしち春といはほたちもたいる松の美さ

礼

勝連貞

いつも春ことに千代の縁むすてかはる色ないさめ松の姿

智

翁長良才

春の春ことに契りしち松の千代の色含てもたい美さ

信

勝連貞

庭の老松の春と縁むすて幾千としまても栄る美さ

秀

高江洲昌壯

春ことに松のみとりさしそへてさかて行く先や千としまても

秀

稻嶺盛治

幾春になてもみとりさしそへて我如古平松の栄る美さ

佳

高江洲昌壯

御代のお恵にあふの山松のいく春よ契るいるの清さ

佳

浦添朝長

常磐なる松やすかへりの花の咲かはりかはり春の姿

追吟

當銘朝穎大人

幾千代の春とちきりしち松のとしことに栄る色のきよらさ

追吟

當銘朝穎大人

雪霜のふてもかはることないさめいく春ゆちきる松のみさを

大正三年三月一二日付「沖毎」第一八四九号

日曜会

三月一日

河水久澄 兼題

点者伊江朝眞

仁

嵩原安光

神代から今にすみて流れゆるかはのみなかみや天の河か

義

高江洲昌壯

むかしから河のにこりないぬあしや君のお恵のつゆのなかれ

礼

勝連貞

神代から河やにこりてもないらぬ流れ汲て民のもののおれしや

智

伊江朝眞

雨のふてはれて澄て流ゆる与座川の水や幾代へたか

信

山田有度

むかしから豊む与座川の流れ手に汲ひ見れば肝もすみて

秀

當口朝穎

昔からすみて河底も見ゆさとゆむ天河や水のかかみ

秀

花城朝忠

むかしから今に美代の露うけて澄て流れゆさ宇治のかはら

秀

宜野山朝修

川のみなかみの深さある故と澄て流れゆさ幾世ひても

秀

安波根朝祥

神世から澄てにこりないんものや豊む与座川の水の鏡

秀

点者伊江朝眞

むかしから今にとよむ多摩川の流れて民の栄る嬉しや

大正三年三月一三日付「新報」第四九六一号

日曜会

三月一日

河水久澄

兼題

伊江朝眞

仁

嵩原安光

1554 神代から今にすみて流れゆるかはのみなかみや天の河か

義 高洲昌壯

1555 むかしから河のにこりないぬあすや君のお恵のつゆのなかれ

礼 勝連貞

1556 神代から河やにこりてもないらぬ流れ汲て民のもののおれしや

智 伊江朝薫

1557 雨のふてはれて澄て流ゆる与座川の水や幾代へたか

信 山田有度

1558 むかし豊む与座川の流れ手に汲ひ見れば肝もすみて

秀 當銘朝頼

1559 昔からすみて河底も見ゆさとよむ天河や水のかかみ

秀 花城朝忠

1560 むかしから今に美代の露うけて澄て流ゆさ宇治のかはら

秀 宜野山朝修

1561 川のみかみの深さある故と澄て流れゆさ幾世ひても

秀 阿波根朝祥

1562 神世から澄てにこりないんものや豊む与座川の水の鏡

点者 伊江朝眞

1563 むかしから今にとよむ多摩川の流れて民の栄る嬉しや

大正三年三月一四日付「新報」第四九六二号

日曜会 三月八日

田家花 当座 伊江朝眞

甲 仲濱政模

1564 賤かうちかへす荒小田の水にたなびちやる雲や桜さらめ

乙 大山朝眞

1565 雲と思めなちやさはるはると見ゆる小山田の里の花のさかり

丙 神山處如

1566 めくて春くれは山田もる人も花にうかされて遊ひくらち

丁 仲濱政模

1567 鷺のとひ立ゆる小山田の水にかけうつちさちやる花の清さ

戊 高安朝常

1568 山田もる賤もひひのはさやすて花見しちくらちもちのふさ

秀 伊江朝薫

1569 稲ふきのいほにわひ住やしちも花の咲く頃や遊て暮さ

秀 高安朝常

1570 門の田に真しらかけうつちさきやるはなにうきやかゆさ草のい

ほり

佳 當銘朝頼

1571 咲く花の本に肝やひかれやひ小田の耕も与所になしゆさ

佳 大山朝眞

1572 あゆむ道ゆとて詠めふりしちやさ小田のそて垣の花のさかり

点者 伊江朝眞

1573 蛙なく小田の稲の久葉いろにうきやかやひみゆさ門の桜

大正三年三月一四日付「沖毎」第一八五一号

日曜会 三月八日

田家花 当座 点者伊江朝眞

甲 仲濱政模

1574 賤かうちかへす荒小田の水にたなびちやる雲やさくらさらめ

乙 大山朝眞

1575 雲と思めなちやさはるはると見ゆる小山田の里の花のさかり

1576 丙 神山處如
めくて春くれは山田もる人も花にうかされて遊びくらち

丁 仲濱政摸

1577 驚のとひ立ゆる小山田の水にかけうつちさちやる花の清さ

戊 高安朝常

1578 山田もる賤もひひのはさやすて花見しちくらちももちのふさ

秀 伊江朝薫

1579 稻ふきのいほにわひ住やしちも花の咲く頃や遊て暮さ

秀 高安朝常

1580 門の田に真しらかけうつちさきやるはなにうきやかゆさ草のいほり

佳 當銘朝顚

1581 咲く花の本に肝やひかれやひ小田の耕も与所になしゆさ

佳 大山朝眞

1582 あゆむ道□とて詠めふりしちやさ小田のそて垣の花のさかり

点者伊江朝眞

1583 蛙なく小田の稻の久葉いろにうきやかやひみゆさ門の桜

大正三年五月一日付「沖毎」第一八九七号

三六会

春情在花 兼題 撰者當銘朝顚

仁 高江洲昌壯

1584 春やよしの花の白雲にこころうかりゆさ朝も夕も

義 高江洲昌壯

1585 残るしら雪も春風にとけてこころよしの山花の木蔭

礼 勝連貞

1586 長閑なる春や心わかかへて花にうかれゆさ朝も夕も

智 翁長良才

1587 春にうかされてののことも忘れて肝や朝夕も花の木蔭

信 稻嶺盛治

1588 匂ひ吹く風に心さそわれて花の咲く山に朝夕くらち

秀 花城朝忠

1589 匂にさそはれて朝夕我か肝やゆきかゆひかゆひ花の木蔭

佳 賀數朝睦

1590 野辺も山の端もさくら咲きつつち我肝まで朝夕花になゆさ

大正三年五月二日付「沖毎」第一八九八号

三六会

仙家 当座 撰者當銘朝顚

仁 神山處如

1591 通ひ路もないらぬ山口の宿や友鶴の外に与所の知ゆみ

義 高江洲昌壯

1592 住む人や誰かす尋やひ見ほしや雲かかて見ゆる山のいほり

礼 勝連貞

1593 柴の戸よたたち尋やい見ほしや浮世はなれたる山のいほり

智 花城朝忠

1594 立寄ひ見ほしや谷の松かけに浮世はなれたる人の住家

信 嵩原松亭

1595 幾年かへたら深山谷底に菊とたのしのる人の住家

追吟

1596 山路ふみはけて尋やひ見ほしやうきよすて人の雲のいほり

大正三年六月三日付「沖毎」第一九三〇号

日曜会

五月

郭公 兼題

点者伊江朝眞

甲

渡慶次朝宣

1597 宇の花のさけはいつも我かものと山ほととぎすの宿て鳴さ

乙

翁長良才

1598 山ほととぎすにたかしらち呉たか庭の卯花のさかりなとす

丙

浦添朝長

1599 間もききしほらしや山郭公の立花に来鳴く声のほひ

丁

高江洲昌壯

1600 夜半のほととぎすしゆらし鳴声やおつて今までも耳にのこて

戊

比嘉賀徳

1601 夜半にほととぎす聞ちやる一声や若か待兼るゆみやあらね

秀

大山朝眞

1602 衾れほととぎす思ひ身につつて月に鳴渡る声のつらさ

秀

嵩原安光

1603 まち兼てぎちやる山ほととぎすの夜半の一声や夢のこち

秀

松島朝京

1604 ののよしのあとて衾れほととぎす五月雨の雨にぬれてなちゆか

佳

上江洲由壽

1605 又も一声やきかす時鳥跡影も見らぬ夢のこち

佳

當銘朝額

1606 しはしほととぎす橋にやとてにやまた一声や聞ち呉らな

佳

神山處如

1607 おみきやきもすらぬ山郭公の月に鳴渡る初声きぎやす

御大葬の日首里女子部公園にて

点者伊江朝眞

1608 郭公たいんす声もさみたれて涙たまちらすたねとなたさ

大正三年六月四日付「新報」第五〇四二号

日曜会

五月三十一日

寄衣恋 当座

点者 伊江朝眞

仁

渡慶次朝宣

1609 きる衣のことに打ちかはひかはひ一期たのまらぬ里か御肝

義

松島朝京

1610 里とわか中や御衣のうら表いつ迄ものかぬ御縁さらめ

礼

美里朝珍

1611 思ひ織込てうしやけたる御衣やいつか着い参ら加那志里前

智

大山朝眞

1612 思ひ織くめて胴衣うしやけらは朝夕さもわんと思てたほれ

信

伊江朝英

1613 うかとしち里に浅地御衣くすて思浅さんて思はちやしよか

秀

吉里眞仁

1614 紺染の御衣の色よりもふかく里か仕情もあらなやすか

秀

稲福全名

1615 里か形見の花衣いつも仕情の匂ひ立さ

佳

金武正宣

1616 里かめせかけの下衣呉てたほり朝夕さも拝て伽にしやひら

佳

比嘉賀徳

1617 無蔵か仕情ゆ織くめて呉たるせみの羽衣や着もすたしや

点者 伊江朝眞

1618 夏引の糸に思ひまぢくめて織なちやる布や胴裳召れ

甲 渡慶次朝宣

1619 うの花のさけはいつも我かものと山ほととぎすの宿て鳴さ

大正三年六月五日付「新報」第五〇四三号

日曜会 五月卅一日

郭公 兼題 点者 伊江朝眞

乙 翁長良才

1620 山ほととぎすにたか知らち呉たか庭の卯の花のさかりなとす

丙 浦添朝長

1621 聞もききしほらしや山郭公の立花に来鳴く声のほひ

丁 高江洲昌壯

1622 夜半のほととぎすしゆらし鳴声やおつて今までも耳にのこて

戊 比嘉賀徳

1623 夜半にほととぎす聞ちやる一声や若か待兼ねるゆみやあらね

秀 大山朝眞

1624 衾れほととぎす思ひ身につつて月に鳴渡る声のつらさ

秀 高原安光

1625 待かねてきちやる山ほととぎすの夜半の一声や夢のここち

秀 松島朝京

1626 ののよしのあとて衾れほととぎす五月雨の雨にぬれて鳴か

佳 上江洲由壽

1627 又も一声やきかす時鳥跡影も見らぬ夢のここち

佳 當銘朝頼

1628 しはしほととぎす橋にちとてにちまた一声や聞き呉らな

佳 神山處如

1629 おみきやきもすらぬ山郭公の月に鳴渡る初声きぎやす

御大葬の日首里女子部公園にて

点者 伊江朝眞

1630 郭公たいんす声もさみたれて涙たまちらすたねとなたさ

大正三年六月五日付「冲毎」第一九三三号

日曜会 五月

寄衣恋 当座 点者伊江朝眞

仁 渡慶次朝宣

1631 きる衣のことに打ちかはひかはひ一期たのまらぬ里か我肝

義 松島朝京

1632 里とわか中や御衣のうら表いつまでものかぬ御縁さらめ

礼 美里朝珍

1633 思ひ織くめてうしやけたる御衣やいつかちちい参ら加なし里め

智 大山朝眞

1634 思ひ織くめて□衣うしやけらは朝夕さもわんと思てたほれ

信 伊江朝英

1635 うかとしち里に浅地御衣くすて思浅ささんて思はちやしよか

秀 吉里眞仁

1636 紺染の御衣のいろよりもふかく里が仕情もあらなやすか

秀 稻福全名

1637 里か形見の花衣いつも仕情の匂ひ立さ

佳 金武正宣

1638 里かめせかけの下衣呉てたほり朝夕さも拝て伽にしやひら

佳 比嘉賀徳

1639 無蔵か仕情ゆ織くめて呉たるせみの羽衣や着もすたしや

点者伊江朝眞

1640 夏引の糸に思ひまちくめて織りなちやる布や□裳召れ

大正三年六月二〇日付「沖毎」第一九四七号

日曜会 六月

不慮逢恋 兼題 点者伊江朝眞

仁 知念政和

1641 たまさかに栞て嬉しや哀(なつ)かしやのいこと葉やつまで涙計り

義 高安朝常

1642 たまさかの今宵つもとし月のおもひかたらゆす夢やあらね

礼 稻福全名

1643 いつも思ひねの夢やまたあらね□(おみ)きやきもすらぬ御傍よたす

智 山川朝赴

1644 夢やきやうん見たぬ御行逢拜今宵嬉しさのあまり物もいやらぬ

信 翁長良才

1645 思きやけもすらぬ御行逢拜今日や嬉しさのあまり袖とぬらす

秀 森田孟徳

1646 たまさかの今宵現ても思まぬむしか思ひねの夢やあらね

秀 美里朝珍

1647 自由ならぬともておみ切やい居す今宵や御行逢拜て百氣延たさ

秀 伊江朝英

1648 嬉しや哀(なつ)かしやの袖と濡しやびるおみちやけも知ぬお傍よたす

1649 長命(ながら)へてをれば□(おみ)ちやきもすらぬ御行逢拜て

佳 嵩原安光

すゆる節もあため

佳 伊江朝薫

1650 もしか夢中のよめやまたあらね思ちやけもすらぬ御傍よたす

佳 阿波根朝祥

1651 こかと山原に御行逢拜て里め語らゆる今宵よめやあらね

点者伊江朝眞

1652 おみちやきんすらぬ路□やに栞て肝やはひつまで物もいやらぬ

大正三年六月二二日付「沖毎」第一九四九号

日曜会 六月

薬 当座 点者伊江朝眞

1653 飲めは世話ことも忘れゆる酒やももといつまでもしなぬ薬り

義 山城宗蔭

1654 こころやし□ゆる月花の蔭とくすりより増さる薬さらめ

礼 大宜味朝隆

1655 若さたる間のいけんよすことや年ととと知ゆさ薬なたす

智 松島朝京

1656 いつし名の朽ゆか草葉なみ分ち薬定めたる人のむかし

信 渡慶次朝宣

1657 心なくさめて百氣いちのひゆるさけと世の中のくすりさらめ

秀 稻福全名

1658 毒になる酒もこころあてのめはももちいけのふる薬さらめ

秀 山川朝赴

1659 吞過ちいきはとくもやらやすか心あて吞は酒とくすり
秀 山城宗蔭

1660 身持つつしみとかなめさめ誰もたとへ神々の業のても
佳 比嘉賀慶

1661 年の寄てからの晩酌の酒や玉の結ゆのはす業さらめ
佳 高原安光

1662 病ひ治めゆる苦業こころ人のいましめや肝にとめり
佳 高原安光

1663 草葉なめわかちくすりしらへたる人のいさをしや世世にのこて
点者伊江朝眞

1664 汗の玉ちらち荒小田の業につかれたる時や酒とくすり
大正三年六月二三日付「新報」第五〇六一号

日曜会 六月

不慮会恋 兼題 点者 伊江朝眞

仁 知念政和

1665 たまさかに拝て嬉しやなつかしやのいこと葉やつまで涙はかり
義 高安朝常

1666 たまさかの今宵つもととし月のおもひかたらゆす夢やあらね
礼 稻福全名

1667 いつも思ひねの夢や又あらねおみきやきもすらぬ御側よたす
智 山川朝赴

1668 夢やきやうん見たぬ御行逢をかも今宵嬉しさのあまり物もいや
らぬ

1669 思みきやけもすらぬ御行逢をかて今日や嬉しさのあまり袖とぬ
信 翁長良才

1670 たまさかの今宵現ても思まぬむしか思ひねの夢やあらね
秀 森田孟徳

1671 自由ならぬともておみ切やい居たす今宵や御行逢拜て百氣延た
さ 美里朝珍

1672 嬉しやなつかしやの袖とぬらしやひるおみちやけもすらぬ御側
秀 伊江朝英

1673 なからへてをれはおみちやきもすらぬ御行逢拜てすゆる節もあ
佳 高原安光

ため 伊江朝薫

1674 もしか夢中の夢やまたあらね思みちやけもすらぬ御側よたす
佳 阿波根朝祥

1675 こかと山原に行逢拜て里め語らゆる今宵夢やあらね
点者伊波朝眞

1676 おみちやきんすらぬ路くやにおかて肝やはひつまでものもいや
らぬ

大正三年六月二四日付「新報」第五〇六二号

日曜会 六月十四日

薬 当座 点者 伊江朝眞

仁 渡嘉敷通昆

1677 飲めは世話ことも忘れゆる酒やももといつ迄もし口ぬくすり
義 山城宗蔭

1678 ころろやしなゆる月花□陰とくすりより増さる葉さらめ

礼 大宜見朝隆

1679 若さたる間のいけんよすことや年とてと知ゆさ葉なたす

智 松島朝京

1680 いっ□名の朽ゆか草葉なみ分ち葉定めたる人の昔し

信 渡慶次朝宣

1681 心なくさめて百気いちのひゆるさけと世の中のくすりさらめ

秀 稲福全名

1682 毒になる酒もころろあてのめはももちいけのふる葉さらみ

秀 山川朝赴

1683 呑過ちいきはとくもやらやすか心あて呑は酒とくすり

秀 山城宗蔭

1684 □持つつしめとかなめさめ誰もたとへ種々の葉のても

佳 比嘉賀慶

1685 年の寄てからの晩酌の酒や玉の緒ゆのはす葉さらめ

佳 高原安光

1686 病ひ治めゆる苦葉ころろ人のいましめや肝にとめり

佳 高原安光

1687 草葉なめわかちくすりしらへたる人のいさをしや世々にのこて

点者 伊江朝眞

1688 汗の玉ちらち荒小田の業につかれたる時や酒とくすり

大正三年七月一五日付「沖毎」第一九七二号

日曜会

七月

公園燈

兼題

点者伊江朝眞

仁

知念政和

1689 たるも主なゆる吾妻やに登て燈火のかけに遊ぶ嬉しや

義 鉢嶺清温

1690 茶屋の燈火も夜々に数増ちやさ夏も与所なしゆる奥武の山べ

礼 糸満朝庸

1691 木間のきやかゆる月と思なちやさ奥武の松山のそののともし

智 渡慶次朝宣

1692 上下もともに遊てたのしみゆる園のともし火のかけのさやか

信 比嘉賀慶

1693 遊て咎目らぬ園の中照らすともし火や美代の光りさらめ

秀 鉢嶺清温

1694 燈火の影もすたたと見ゆさ夏も与所なしゆる奥武の山べ

秀 具志川朝及

1695 今日も押つれて奥武山のほとともし火のかけにすたて遊は

秀 高安朝常

1696 ともし火のかけに闇も昼なちやさまこと御万人のあそびところ

佳 稲福全名

1697 よるもひるなしゆる園の燈火にさそはれて遊ぶ上も下も

佳 松島朝京

1698 燈火のかけにうちやかやひ見ゆさ御万人の遊ぶ園の景色

佳 美里朝珍

1699 奥武のまつ山の燈火のかけに夜もひるなちゆて遊ぶ嬉しや

点者伊江朝眞

1700 瓦斯の燈火やあつまやにつかてひるよりも増る園の景色

大正三年七月一六日付「新報」第五〇八四号

日曜会

七月

1712	1711	1710	1709	1708	1707	1706	1705	1704	1703	1702	1701	公園燈 兼題 点者 伊江朝眞
瓦斯の燈火や東屋につかて昼よりも増る園の景色 点者 伊江朝眞	奥武の松山の燈火のかけに夜も昼なちゆて遊ぶ嬉しや 点者 伊江朝眞	燈火の影にうちやかやひ見ゆさ御万人の遊ぶ園の景色 佳 美里朝珍	よるも昼なしゆる園の燈火にさそわれて遊ぶ上も下も 佳 松島朝京	燈火のかけに闇も昼なちやさまこと御万人のあそひところ 佳 稻福全名	今日も押つれて奥武山のほて燈火のかけ口すたてあそは 秀 高安朝常	燈火の影もすたすと見ゆさ夏も与所なしゆる奥武の山へ 秀 具志川朝及	遊て咎目らぬ園の中照らす燈火や美代の光りさらめ 秀 鉢嶺清温	上下も共に遊てたのしみゆる園のともし火の影のさやか 信 比嘉賀慶	木間のきやかゆる月と思なちやさ奥武の松山のそののともし 智 渡慶次朝宣	茶屋の燈火も夜々に数増ちやさ夏も与所なしゆる奥武の山へ 礼 糸満朝庸	たるも主なゆる吾妻やに登て燈火のかけに遊ぶ嬉しや 義 鉢嶺清温	仁 知念政和

1722	1721	1720	1719	1718	1717	1716	1715	1714	1713	大正三年七月一八日付「新報」第五〇八六号 日曜会 七月十二日 点者 伊江朝眞
軒つつきやとの大和なてしこの露にぬれ顔の色のしほらしや 点者 伊江朝眞	とりななてしこやさきに咲出たさ同じ日に蒔やる種子ゆやすか 佳 山城宗得	押風とつれてしほらし句たちゆすとなり撫子のさかりなたら 佳 稻福全名	竹のま口垣に庭やへたてても撫子の句の送るしほらしや 秀 比嘉賀慶	隣りなてしこの色々に咲けは咲ぬわか宿も句ひのしほらしや 秀 大宜見朝隆	垣間から見ゆるとなりなてしこの句やへたてらぬ送て具ゆさ 信 浦添朝長	となり撫子の露にぬれかほや垣間から見ちもすたくなゆさ 智 嵩原安光	大和なてしこの花におちやかゆさ垣ゆひさめたる賤か住家 礼 大山朝眞	もつましき中の隣りやてからと撫子の花やのそち見ちやる 義 龜山朝奉	中垣にさきやるなてしこの花の主やたかやゆらさためかねて 仁 山田有度	隣瞿麦 当座 点者 伊江朝眞

大正三年八月一日付「新報」第五一〇九号
日曜会
八月四日

名所灌 当座 点者 伊江朝眞

仁 山城宗得

引晒ちおきある布と見まかゆさ数久田ととろぎの灌の流れ

義 稻福全名

雲間流れゆる布引の灌の水上や天の河やあらね

礼 名護朝直

いつか布なしゆら豊も轟の岩かねにかける灌のしら糸

智 大宜見朝隆

てかよ押つれて□の灌の音に忘りらな夏の暑さ

信 具志川朝及

数久田轟やかんすたしやあすか灌の水上の秋やあらに

秀 大山朝眞

立寄ひ見れば夏も与所なしゆさあつさしら川の灌のふもと

秀 山城宗蔭

いつも春さらめ心浮上ゆさ鶯の灌のひひき聞けは

秀 金武正宣

浮世名に立る数久田ととろぎや夏の日のあつさ暮しところ

佳 比嘉賀徳

見る人の肝の欲悪も洗てこころ清水の灌の流れ

佳 翁長良才

数久田轟の灌の玉水や流れ行末のはてやしらぬ

佳 浦添朝長

轟の灌の音もさらさらと岩にくたけゆる玉の清水

点者 伊江朝眞

山の端にかかて朝夕さも晒布引の灌や神の美衣や

1734

1733

1732

1731

1730

1729

1728

1727

1726

1725

1724

1723

大正三年八月一日付「新報」第五一三三號

日曜会 大正三年八月

竹間夏月 兼題 点者 伊江朝眞

仁 渡慶次朝宣

押風になひく庭のわか竹にすたすたとやとる月の清さ

仁 山城宗得

押風になひく窓のくれ竹にすたすたと月のやとる清さ

義 高安朝常

竹の葉にむすふ露の玉みかちすたすたとてゆさ夏の御月

礼 阿波根朝祥

竹間からもれて椽に照る月にすたすたとなたさ夏の暑さ

智 金武正宣

夏くりもはりて月や我かやとの竹間からもよる影の涼しや

信 松島朝京

庭の若竹のはこしからもれてまどに入る月の影の涼しや

秀 吉里眞仁

竹間からむれる今宵の月影やこかねより出口心地さらめ

秀 松島朝京

涼しさの余り秋と思みなしゆさ竹間からもれる月の美かけ

佳 嵩原安光

見るも涼しさを押風もなひく竹間からもれる夏の御月

佳 山城宗蔭

ね座敷のうち竹の影うつち涼た涼たと照らす月の清さ

点者 伊江朝眞

空にてる月も雲の御衣はつてすたすたとやとる竹の林

1745

1744

1743

1742

1741

1740

1739

1738

1737

1736

1735

大正三年九月一六日付「沖毎」第二〇三三三号

日曜会 九月十三日

山家首秋 当座 点者伊江朝眞

仁 山城宗隆

浮世ならはしの秋のかなしさもしらすわか山の桐の一葉

義 渡慶次朝宣

西風とつれて山里のにはに萩の咲きそめる秋になたさ

礼 稻福全名

蝉の音やかれてにや又ひくらしの鳴ち声聞き暮す山のいほり

智 比嘉春株

空に秋風の吹き初てからや扇子手はなしゆさ山のいほり

信 山城宗得

田舎山国やむしの声ききとにや又はつ秋の節や知ゆる

秀 屋嘉比政兄

秋やいつきちやか山里の庭に桐の葉の一ツちりてをすか

秀 具志川朝及

山里の庭の草の葉に結ふつゆや初秋のしるしさらめ

佳 大宜見朝隆

鳴るさを鹿と雁の声ゆ聞と秋やしられゆさ山の住家

佳 大山朝眞

松の葉にそゆく風のおと聞と山住の人の秋や知ゆる

佳 稻福全名

風の音聞と秋もしられゆさ浮世はなれたる山の住家

点者伊江朝眞

山里の習やまつに吹すぎる風の音ききと秋やしゆる

1756

1755

1754

1753

1752

1751

1750

1749

1748

1747

1746

大正三年九月一八日付「沖毎」第二〇三五五号

日曜会 九月

初恋 兼題 点者伊江朝眞

仁 賀數朝睦

ののあてもないらぬ童あてなしの恋の初草やいちやし摘のか

義 比嘉春株

袖しほる涙やむねにもえそめる恋の若草の露やあらぬ

礼 宜野山朝修

思みやむて居たる古宇利の初旅もやすやすと今宵つちやる嬉し

智 松島朝京

恋の初旅に渡っていく今日やいちやらぬ世話のわ肝たち

信 大山朝眞

思みやむてをたる恋の深山路もこころ安安と今日とわたる

秀 龜山朝奉

きや程嬉しさか今日のよかる日に又とないん二人か千代の契

秀 大宜見朝隆

こひの初渡りしは浪も立ついいちやしかいとやい舟や漕か

佳 知念棚敦

親の導かぬ恋の初旅にわたても思みの□もないらぬ

□ 知念□□

□□□草のもえそめてをすかいつの□に心はるになたか

点者伊江朝眞

いつの間に童こころ春なたか花よりも色のきよらくなたす

1766

1765

1764

1763

1762

1761

1760

1759

1758

1757

大正三年九月一九日付「新報」第五一四七号

本館蔵書 大正三年九月

日曜会 大正三年九月

初恋 兼題 点者 伊江朝眞

仁 賀数朝睦

1767 のあてもないらぬ童あてなしの恋の初草やいちやし摘のか

義 比嘉春株

1768 袖しほる涙や胸に萌そめる恋の若草の露やあらね

礼 宜野山朝修

1769 思みやむて居たる古宇利の初旅もやすやすと今宵着やる嬉しや

智 松島朝京

1770 恋の初旅に渡っていく今日やいち言らぬ世話のわ肝たち

信 大山朝眞

1771 思みやむてをたる恋の深山路も心やすやすと今日とふたる

秀 龜山朝奉

1772 きや程嬉しさか今日のよかる日に又とないん二人か千代の契

秀 大宜見朝隆

1773 こひの初渡りしは浪も立いいちや權とやい舟や漕ゆか

佳 知念棚敦

1774 親の導かぬ恋の初旅に渡ても思みの果もないらぬ

佳 知念政和

1775 恋の若草のもえそめてをすかいつの間心はるになたか

点者 伊江朝眞

1776 いつの間にわらへ心春なたか花よりも色のきよらくなたす

大正三年九月二一日付「新報」第五一四九号

日曜会 大正三年九月

山家首秋 当座 点者 伊江朝眞

仁 山城宗隆

1777 浮世ならわしの秋のかなしさもしらすわか山の桐の一葉

義 渡慶次朝宣

1778 西風とつれて山里のにはに荻の咲きそめる秋になたさ

礼 稻福全名

1779 蝉の音やかれてにや又ひくらしの鳴ち声聞き暮す山のいほり

智 比嘉春株

1780 空に秋風の吹き初てからや扇子手はなしゆさ山のいほり

信 山城宗得

1781 田舎山国やむしの声ききとにや又はつ秋の節や知る

秀 具志川朝及

1782 山里の庭の草の葉に結ふつゆや初秋のしるしさらめ

佳 大宜見朝隆

1783 鳴るさを鹿と雁の声ゆ聞と秋やしられゆさ山の住家

佳 大山朝眞

1784 松の葉にそゆく風のおと聞と山住の人の秋や知ゆる

佳 稻福全名

1785 風の音聞と秋もしられゆさ浮世はなれたる山の住家

点者 伊江朝眞

1786 山里の習やまつに吹すきる風の音ききと秋やしゆる

大正三年一〇月八日付「沖毎」第二〇五四号

日曜会 十月

秋月 当座 点者伊江朝眞

仁 渡慶次朝宣

1787 月やつきことにてる月とやすかかはて照り清さあきの最中

1788 義 渡慶次朝宣
思なしかやよらいつよりもことしすみて照り清さあきの御月

礼 屋嘉比政兄

1789 空に照る月やゑの月とやすかいちやしかな秋やかはて清さ

智 大宜見朝隆

1790 照る月のかけに秋のかなしさも忘れてななめゆき今宵の空や

信 大山朝眞

1791 今日や名に立る十五夜さめとめはかはて照り増さ月の光

秀 高安朝常

1792 名に立る月の影にうちやかゆさまとゐしちあそぶ歌のむしろ

秀 渡慶次朝宣

1793 名に立る今宵とらつ山まつのこすえから出る月の清さ

佳 大宜見朝隆

1794 あかぬななめよき雲の御衣はつて木間のちやかゆ□秋の御月

佳 大宜見朝隆

1795 雲井はるはると飛□雁かねのかつまでも見ゆき秋の御月

点者伊江朝眞

1796 名に立る御月ひととせに一度鳥やうたらはん遊てむたな

大正三年一〇月九日付「新報」第五一六六号

日曜会 十月

兼題 点者伊江朝眞

浮世 仁 渡慶次朝宣

1797 無常のうきよや時のまにかわるあちさひの花のすかた

義 屋嘉比政兄

1798 うきもよろこひもゆきめぐりめぐりきたためかたなさと浮世さら

1799 め 知念續昌

礼 小車のことに行めぐりめぐりきたまらぬものや浮世さらめ

智 糸満朝庸

1800 なみ風も立ぬすみよしの浦に浮世こく舟やつなきおかな

信 山城宗隆

1801 嬉しことはかりのせて挽れゆる浮世小車のあらなやすか

秀 川平恵許

1802 年波と共に世話も積み重て浮世こく舟の渡り苦しや

秀 阿波根朝祥

1803 楽も苦も浮世さめともて朝夕はたらちゆす人のかかみ

佳 宜野山朝修

1804 押風になひく浮雲のことに定めかたなさと浮世さらめ

佳 阿波根朝祥

1805 海士の身にならて浮世こく舟も安す安すと渡ることやならぬ

点者伊江朝眞

1806 伊平屋の田名堀うき島のこと風ままになゆす浮世さらめ

大正三年一〇月九日付「沖毎」第二〇五五号

日曜会 十月

兼題 点者伊江朝眞

浮世 仁 渡慶次朝宣

1807 無情のうきよや時のまにかはるあちさひの花のすかた

義 屋比久政兄

1808 うきもよろこひもゆきめぐりめぐりきたためかたなさと浮世さら

め

1809 礼 知念績昌
小車のことに行めぐりめぐりきたまらぬものや浮世さらめ

智 糸満朝庸

1810 なみ風も立ぬすみよしの浦に浮世こく舟やつなぎおかな

信 山城宗蔭

1811 嬉しことはかりのせて挽れゆる浮世小車のあらなやすか

秀 川平恵許

1812 年浪と共に世話も口重て浮世こく舟の渡り苦しや

秀 安波根朝祥

1813 楽も苦も浮世さめともて朝夕はたらちゆす人のかかめ

佳 宜野山朝修

1814 押風になひく浮雲のことに定めかたなさや浮世さらめ

佳 安波根朝祥

1815 海士の身にならて浮世こく舟も安す安すと渡ることやならぬ

点者 伊江朝眞

1816 伊平屋の田名掘うき島のこと風ままになゆす浮世さらめ

大正三年一月一日付「新報」第五一六七号

日曜会 十月四日

秋月 当座 点者 伊江朝眞

仁 渡慶次朝宣

1817 月やつきことにてる月とやすかかはて照り清さあきの最中

義 渡慶次朝宣

1818 思みなしかやよらいつよりも今年すみて照り清さあきの御月

礼 屋嘉比政兄

1819 空に照る月や糸の月とやすかいかやしかな秋やかはて清さ

1820 智 大宜見朝隆
照る月のかげに秋のかなしさも忘口なかめゆさ今宵の空や

信 大山朝眞

1821 今日や名に立る十五夜さめとめはかはて照り増さ月の光

秀 高安朝常

1822 名に立る月のかげにうちやかゆさまとぬしちあそふ歌のむしろ

秀 渡慶次朝宣

1823 名に立る今宵とらつ山まつのこすえから出る月の清さ

佳 大宜見朝隆

1824 あかぬなかめよさ雲の御衣はつて木間のちやかゆる秋の御月

佳 大宜見朝隆

1825 雲井はるはると飛る雁かねのかつまでも見ゆさ秋の御月

点者 伊江朝眞

1826 名に立る御月ひととせに一度鳥やうたらはん遊てむたな

大正三年一月一八日付「沖毎」第二一二二号

日曜会 十二月

中城懐古 兼題 点者 伊江朝眞

仁 渡慶次朝宣

1827 月日ある間やいつもこの城にひかりかかやちゆら国のかなへ

義 糸満朝庸

1828 今に跡のこるしろの高殿にのほてなつかしや人の口

礼 山城宗蔭

1829 いちこさんまるの恨みあるゆへか中城くすく露のしけさ

智 伊江朝英

1830 豊む中城よしやありあけの月に照り増る君かみさを

1831 信 稻福全名
いく千年へても残る石垣や豊む護佐丸の形見さらめ

1832 秀 比嘉賀慶
くたけたる玉のひかりあることに代代に中城沙汰やのこて

1833 秀 比嘉春株
城の老松に吹すきる風もあまわり恨みゆさ朝も夕も

1834 佳 具志頭朝香
城やあれはてていく年よへてもよしや有明のつきにのこて

1835 佳 渡慶次朝宣
荒れはててをてもいち護佐丸のよしや此の城にいつものこて

1836 点者伊江朝眞
勝連のおさへとよむ中城あれて耳つくのやとり所

大正三年二月二〇日付「沖毎」第二二二四号
日曜会 十二月

1837 仁 名護朝直
歳暮 当座 点者伊江朝眞
くれていく年の日数ふる雪のかみに積かさて名残ましゆさ

1838 義 兼島景福
かちいくさほこ口寅年やくらちうれし卯の年もとなりなたさ

1839 礼 具志頭朝香
しからみゆ立てとみうちやならねなどの年なみのよらぬことに

1840 智 知念棚敦
油断しやる我身の肝と怒らみよるもとちもとさらぬ年も暮て

1841 信 稻福全名
手毬打遊ふわらんきやのことに寄る年も忘てくらしほしやの

1842 秀 岸本賀雅
わみや年波のよよすをしむすか童んきや誇て年とまちゆさ

1843 秀 森田孟徳
心安す安すと月も日も暮ちよらて語らゆる口の嬉しや

1844 秀 森田孟徳
一事てもなさぬ月日はへ過ちいたつらに暮す歳の恨みしや

1845 佳 大宜見朝隆
老の身に又もつにゆる一年やなからとる間の重荷さらめ

1846 佳 名護朝直
明日もあんともてあたら年月もいたつらに暮我肝やにゆさ

1847 佳 大宜見朝隆
いたつらにこ年月花に遊て一事さへなさぬ事の恨みしや

1848 点者伊江朝眞
とら年やにや又夢の間にすくちまこととら年やとらの走り

大正三年二月二三日付「新報」第五三三八号
日曜会 十二月

1849 仁 兼題 点者伊江朝眞
中城懐古 兼題 渡慶次朝宣
月日ある間やいつもこの城に光かかやちゆら国のかなへ

1850 義 糸満朝庸
今に跡のこるしろの高殿にのほてなつかしや人の昔

1851 礼 山城宗蔭
いちこさんまるの恨あるゆへか中城くすく露のしけさ

1852 智 伊江朝英
豊む中城由やありあけの月に照り増る君かみさを

1863 手毬打遊ふわらんきやのことに寄る年も忘れてくらしほしやの
信 稻福全名

1862 油断しやる我身の肝とおらみよるもとちもとさらぬ年も暮て
智 知念棚敦

1861 しからみゆ立てとみうちやならねなどの年なみのよらぬことに
礼 具志頭朝香

1860 かけいくさほこて寅年やくらちうれし卯の年もとなりなたさ
義 兼島景福

1859 くれていく年の日数ふる雪のかみに積かさて名残ましゆさ
仁 名護朝直
当座 点者伊江朝眞
大正三年十二月十三日

1858 勝連のおさへとよむ中城あれて耳つくのやとり所
点者伊江朝眞

1857 荒れはててをてもいち護佐丸のよしや此の城にいつものこて
佳 渡慶次朝宜

1856 城やあれはてていく年よへてもよしや有明のつきにのこて
佳 具志頭朝香

1855 城の老松に吹しきる風もあまわり恨みゆさ朝も夕も
秀 比嘉春株

1854 くたけたる玉の光あることに代代に中城沙汰やのこて
秀 比嘉賀慶

1853 いく千年へても残る石垣や豊む護佐丸の形見さらめ
信 稻福全名

1874 山里の垣にかかる白雪や梅の花さちやる春のこち
智 賀數朝睦

1873 春と思みなちやさ山のさくら木にかかる白雪の花のすかた
礼 名護朝直

1872 雪や花こころ埋火の元や春と思なしゆさ山□すゆか
義 渡慶次朝宣

1871 さくらすみいけて春のことなたさ雪□花ちりる山のいほり
仁 名護朝直
兼題 点者伊江朝眞
大正四年一月一四日付「新報」第五二五七号
日曜会 一月十日

1870 とら年やにや又夢の間にすくちまこととら年やとらの走り
点者伊江朝眞

1869 いたつらにこ年月花に遊て一ことさへなさぬ事の恨みしや
佳 大宜見朝隆

1868 明日もあんともてはたら年月もいたつらにくらち我肝やにゆさ
佳 名護朝直

1867 老の身に又もつにゆる一年やなからとる間の重荷さらめ
佳 大宜見朝隆

1866 一事てもなさぬ月日はへ過ちいたつらに暮す歳の恨みしや
秀 森田孟徳

1865 心やすやすと月も日も暮ちよらて語らゆる事の嬉しや
秀 森田孟徳

1864 わみや年波のよやすをしむしか童んきやや誇て年とまちゆさ
秀 岸本賀雅

1875 信 山城宗得
春のことなたさ梅の咲ちすめてこころうきやかゆる山の庵

秀 渡慶次朝宣

1876 冬山里の春のことなたすねやに桜すみたちゆる故か

秀 與那原良儀

1877 寒さ身にしみる冬山里も埋火の元や春のこころ

佳 當銘朝顯

1878 真柴折たちゆる山宿や冬も長閑なる春のこころさらめ

佳 大宜見朝隆

1879 埋火の元やふり積る雪も花のことみゆさ草のいほり

点者伊江朝眞

1880 恩納松下に羽つきゆるわらへ振袖の風や春の心地

大正四年一月一五日付「新報」第五二五八号

日曜会 一月十日

欲絶恋 当座

互選伊江朝眞 兼島景福
渡慶次朝宣 稻福全名

仁 伊江朝眞

1881 里とわか中の縁や夏引の糸よりも細くなたるらみしや

義 名護朝直

1882 蜘蛛かすにかかる露の玉こころ一期たのまらぬ里か御肝

礼 大山朝眞

1883 いつまでもともて契る言の葉も衾れ色かわるあぎになたみ

智 比嘉賀慶

1884 去月や二夜今月や一夜見棄ゆみ里前月来月からや

信 稻福全名

1885 あさましや浮世月日かさねれは契る言の葉も霜にかれて

大正四年二月一四日付「新報」第五二八七号

日曜会 二月

片恋 兼題

仁 知念政置

1886 いつかくりなをち経もからけれかあはぬ片筋の糸のみたれ

義 眞喜志康治

1887 見捨ててかいまいら与所肝かやゆらわか文の御返事あてもない

らぬ

礼 鉢嶺清温

1888 情けあてあれかおみ解ち呉らな与所肝ももたぬ我身のこころ

智 新崎盛重

1889 一期まともて心つくちやすかりや片思ひ我肝つまち

信 岳本岱嶺

1890 あはぬ縁ともて忘れていしちも朝夕忘ららぬ思ひくたち

大正四年二月一五日付「新報」第五二八八号

日曜会 二月

片恋 兼題

秀 点者伊江朝眞
金城秀長

1891 小鳥のことに染らてやりしやすかあれや片思ひ与所になりて

秀 高安朝常

1892 なからへてをれは衾れ片糸の又結ふ節もあひかしやひら

佳 翁長良才

1893 宵も暁も思まぬもの思て一人焦れゆる縁のらめしや

1894 佳 渡久山朝是
浅間しや里前よしやいやなしちゆてゆむたぬふりめしやうち我
肝焼ち

1895 点者伊江朝眞
日日に秋ふかく釣る蚊帳やひるくさむさ身にしみるあはれしゆ
め

大正四年二月一七日付「新報」第五二九〇号

日曜会 二月七日

海村 当座 点者伊江朝眞

仁 高安朝常

1896 日日の管も雨にきしられてまりまりとたちゆる塩屋の煙

義 山川朝赴

あまのわさやすて網よあてをすか沖や波風のあらさあため

礼 稻福全名

門ごとに今日や網さらちあすか沖や波風の高さあため

智 知念績昌

海士のつり舟のかすやます村の竿やとしことに栄て行さ

信 龜山朝奉

夫の魚とれは妻やうり捌ちたんちゆ糸満や栄ていちゆる

秀 兼島景福

漁のわさもとしとしにすすて海士の住宿の栄て行さ

秀 名護朝直

すすむ世の中や海士もわさすすて年ごとに村の栄る嬉しや

佳 高安朝常

1903 年やとしことにあまのわさすすて煙たちつつく美代になたさ

1904 佳 兼嶋景福
釣舟のかすもとしとしにまさて糸満の村やさかていちゆさ

1905 点者伊江朝眞
わか馬や庭につなぎ呉れわらへ貝ひるて互に遊てむたな

大正四年三月二一日付「新報」第五三二二号

日曜会 三月七日

望遠鏡 兼題

仁 神山處如

1906 高殿にのほてめかねとて見ればおきの島島も目の前寄て

義 名護朝直

里かいり船の近くなて来れば朝夕はなされみ玉のめかね

礼 高江洲昌壯

1907 遠めかねとれは四方の島島も近く引寄る庭のまかき

智 山城正常

1908 遥遥とみゆる伊平屋の七はなれ目の前引寄てみゆるかかみ

信 勢理客宗宣

1909 野山近よすて見ゆる玉めかねつくりはしめたる人やたるか

秀 大山朝眞

1910 美崎はるはるとぬきやかゆる船もひち寄て見ゆさ玉のめかね

秀 松島朝京

1911 虎瀬山のほて遠目とて見ればけふり立つつく那覇の景色

佳 美里朝珍

1912 目に見らぬさきも安安と目の前引寄て見せる玉のめかね

佳 浦添朝宣

1913 雲と見まかゆる沖の島島も目の前引寄る玉のめかね

大正四年三月二四日付「新報」第五三二四号

日曜会 三月十四日

摘若菜 当座 点者伊江朝眞

仁 伊江朝眞

ふゆる栗雪も打払ひ払ひ若さあやかゆる若菜摘な

義 具志川朝及

誰かためにつのか野辺の初若菜かくにつめあます花のわらへ

礼 森田孟徳

春雨に袖やのれらわん若菜里かためたいもの摘ななゆみ

智 高安朝常

いつも年ごとにつてあかぬものや野辺にもえ出る若菜さらめ

信 名護朝直

初春とつれてうれしことつのさ雪間もえ出る野辺の若菜

秀 仲濱政摸

うらうらと吹ゆる春風に花の袖とはち若菜つむるしゆらしや

秀 龜山朝奉

はなのおみわらへ風に袖とはちたかたみに摘か野辺の若菜

佳 比嘉賀慶

老の身か年やかさねても春の若菜つてこころ若くなゆさ

佳 仲濱政摸

春雨もはれてけふやうしつれてすみりからす菜つむかうれしや

点者伊江朝眞

霞ふみ分て若菜つむわらへふり袖につつてたるに呉ゆか

大正四年四月一八日付「新報」第五三四八号

日曜会 四月四日

春駒 兼題

仁 山田有度

萌わたる草のいとにひかためおやにはなれたる春の小駒

義 安森盛秀

春の野に出て勇み立駒のいななちゆる声や空にひひき

礼 兼島景福

立髪や野辺の春風にとはち勇みいななきゆさ尾花あし毛

智 龜山朝奉

飛かこと走るまきの春駒や千里とふ龍の種やあらね

信 稻福全名

手繩ゆるみれば春風とつれて嬉しやけさ駒の勇みたちゆさ

大正四年四月二一日付「新報」第五三五一号

日曜会 四月十一日

恋書 当座 点者伊江朝眞

仁 伊江朝薫

思事やつめて筆や引かりらぬ肝のはしばしも染ておきやる

義 名護朝直

もたす此の文に沁のつきをすや思ひ身にあまる涙ともれ

礼 森田孟徳

拝ていかたらいや与所の身の繁さ思わちたほり文のまこと

智 高安朝常

夜のふけるまでも音信もないらん思ひかきこめるふみの御返事

信 比嘉春株

持たすわか文や道中にちらち与所しりて二人浮名立ちゆる

1935 秀 知念續昌
思ひこかりやひ文や持たちやすか返事聞も間のまちぬ苦しや

佳 比嘉賀慶

思ひかきこめてたまちあるふみの返事待る哀れたかすしゆか

点者伊江朝眞

1937 里の手になりし水くきの流くてもつくりらぬ御肝ふかさ

大正四年五月一五日付「新報」第五三七五号

日曜会

寄鳥恋 兼題 点者伊江朝眞

天 與那原良儀

1938 夕間暮になれば肝や飛ひ鳥の嵐吹く空にさわく心ち

地 稻福全名

夕間暮とつれてさはく我か肝やねくらさたまらぬ雀ころこ

人 濱川順達

1940 節鳥もあらぬのよて節まちゆか互に思切と日からさらめ

仁 具志頭朝香

鳥のあと便ておもことやたかひにかよわちゆて朝夕せつと待る

義 名護朝直

誰るに頼まれてまつの戸はたたき我肝さわかしゆる夜半の水鶏

礼 高安朝常

しはしまとろめに袖合やる夢もおとろかち呉ゆめ夜半の水鶏

智 糸満朝義

哀鳴たんで語て呉れ千鳥無蔵の島のらに渡ていかは

信 糸満朝庸

1945 二人か玉の緒や神垣につなきをし鳥の契り祈ておかな

1946 秀 山城正常
邂逅の今宵のかいそきめしやる月にうかれて□鳥や鳴る

秀 糸満朝庸

1947 咲く花んまたん古郷にいそくかりのことあらな里か御肝

佳 名護朝□

1948 秋風とつれてかりや渡たゆすか里か玉章のあてもねいらん

佳 仲尾次政均

1949 夢の間の浮世をし鳥のことに朝夕はなれらぬ暮ち見ふしや

点者伊江朝眞

1950 野辺の石たたきうかとしちんとな恋のはしまりの手引てもの

大正四年五月二〇日付「新報」第五三八〇号

日曜会

春夜 当座 点者伊江朝眞

天 高安朝常

1951 見るもはかなさやおほる夜の月□かけにちり飛る花のふふき

地 比嘉賀慶

花の下蔭に終日遊てあかぬまた夜半の夢に見ゆさ

人 山城宗蔭

のとかなる春やねても嬉しさの夢までも花の蔭に遊て

仁 大宜見朝隆

1954 昼見ちやる花の品さためしゆんでふける夜も忘る春の今宵

義 高安朝常

1955 おほる夜の月に庭出て見れば袖にちりかかるはなのをしき

礼 兼島景福

1956 酒も飲て遊は歌もよてあそは月もうらうらとかすむ今宵

1957 智 大宜見朝隆
ちり飛る花の名残り増す夜半に月の影までも曇て呉ゆめ

1958 信 高安朝常
春雨に花のちりとひゆらとめはねてもねられらぬ明しかねて

1959 秀 具志頭朝香
花にさそはれて月に歌うたひあすておもしろや春の今宵

1960 佳 名護朝直
酌かはしかはし月に歌うたてあける夜もしらぬ花の木蔭

1961 点者伊江朝眞
おほろ夜の月に押風とつれて椽にちり飛るはなのふぶき

1962 点者伊江朝眞
はなもちりはててくれかかる春のをしさあて啼め夜半の蛙

大正四年六月二〇日付「新報」第五四一一号
六月十三日

寄筆恋 当座 点者伊江朝眞
仁 伊江朝眞
義 南島
礼 伊江朝眞
一期てやり契る水茎のあとのかわく間もならぬかわる恨しや

1965 智 浦添朝宜
筆のすさひにふみもたち無蔵かみのたたれならはちやしゆか

1966 信 森田孟徳
筆のあと見ちん所のしるためしむたは火の中にいれて給り

1967 筆とゆる事の我自由とんなれは思ひ身に包てのよて鳴か

1968 秀 稻福全名
肝のまま筆のたちゆる我胸やれはさまさまの思ひすらぬたすか

1969 佳 知念績昌
夜夜にかゆゆたすたかす思しゆかかきなかな筆もしれるためし

1970 佳 渡慶次朝宣
いつも忘れめ里か一筆の書ることの葉のはなの句

1971 佳 渡慶次朝宣
しろかみにそみる筆口あところ仕情やいつも肝にとめれ

1972 点者伊江朝眞
面影やしけく肝や波たてて筆もはくはらぬつくて鳴ゆさ

大正四年六月二一日付「新報」第五四一二号
大正四年六月十三日

精進恋 兼題 伊江朝眞
仁 伊江朝眞
義 渡慶次朝宣
礼 諸見里朝奇
世のちりもつかぬすみそめの袖にのよて佛のすかて呉ゆか

1975 智 神山處如
清水にこころ洗てみやしろにいのる身か思ひあたになゆめ

1976 信 翁長良才
恋の山らしにこころあまかされ百八の玉も与所になしゆさ

1977 大正四年六月二七日付「新報」第五四一八号

大正四年六月十三日

大正四年六月十三日

精進恋 兼題

点者伊江朝眞

秀

渡慶次朝宣

恋のあらしのふきつめてこころ清水になみの立さ

秀

伊江朝薫

恋の氏神もをらん世の中かいもひしち祈かひもないらぬ

佳

森田孟徳

互に身はきよめ神仏かけて結である縁のいつもくちゆみ

佳

勢理客宗宜

朝夕きよめとて祈るわか思ひありかめつち上に知ち給ふれ

佳

点者伊江朝眞

黒染のそてや身につけてをてもありか面影のゆめに見ゆさ

大正四年八月一三日付「新報」第五四六四号

日曜会

八月一日

雨後夏の月

兼題

点者伊江朝眞

仁

屋嘉比政兄

雨晴てあとのはちす葉の露にやとる月見れはすたくなゆさ

義

知念續昌

秋とおみなしゆさ夏雨も晴てすたすと照ゆる月のみかけ

礼

山田有度

五月雨にこもる肝のくらかみも晴てぬぎやかゆる月の清さ

智

渡慶次朝宣

ふたる夏雨の名残しら露にすたすとやとる月の清さ

信

大宜見朝隆

わ肝かき曇てふたる夏雨も晴てすみ渡る月の美さ

秀

安森盛秀

雨晴て雲のわたてから出てすたすと照ゆる夏の御月

秀

稻嶺盛治

見るも涼しさや夏雨のあとの草の葉の露にやとる御月

秀

松島朝京

雲の飛御衣も雨とちりはててすたすとみゆさ月のまはた

佳

糸満朝義

夏雨も晴て庭の呉竹のひまにもる月の影のすたしや

佳

山城宗得

つらさおみなちやる五月雨も晴て澄ててり渡る月の清さ

佳

具志川朝及

かき曇てふたる夏雨も晴てすたすとてたる夜半の御月

佳

点者伊江朝眞

夏雨も晴て庭のまつこしにすたすとこのほる月の清さ

大正四年八月一四日付「新報」第五四六五号

日曜会

八月八日

月下美人 当座

点者伊江朝眞

仁

比嘉盛株

月の影さけて人待ちゆるわらへ時ならぬ梅の咲ちやる心地

義

大宜味朝隆

てる月に布よ晒しゆすやなつけ肝や約束の里と待ちゆら

礼

比嘉賀慶

月見てときやすか月も与所なちゆてみ惚しみられる花の童

智

比嘉盛株

月影よさけて人待ちゆるわらへ花にますすかた雪の真肌

1999	信	龜山朝奉	見る人やたるも心ひかれゆら月にうきやかゆる花のすかた
2000	秀	伊江朝薫	見るもうつくしや月に打向てものみかほしちゆる花の童
2001	秀	山城宗蔭	うつくしや童思ひ有明の月□打向□誰よまぢゆか
2002	佳	比嘉盛株	てる月の影に遊ぶ思わらへ泥中に咲ちやる蓮の姿
2003		点者伊江朝眞	月もなかめらぬかしらさみたれて物みかほしちゆか花のわらへ
大正四年九月一六日付「新報」第五四九七号			
日曜会			
2004	兼題	点者伊江朝眞	つらさ身にあてと衾れ松虫のもゆるともし火に向て飛ら
	仁	龜山朝奉	
	義	久志安均	思みなしかやゆら灯火の花も里かいまひる夜や笑て咲す
2005	礼	比嘉春株	すてられて我身の夜半の面難やともし火のほかにたかす知ゆか
2006	智	嵩原安光	夕間暮になれば肝やともし火のこからしの風にあまくここと
2007	信	上間正才	夜嵐のふけはのかす我か肝や灯火と共にあまぢ呉ゆか
2008	秀	渡慶次長宣	衾れ自由ならぬありかおもかけのややにともし火のかけに見さ
2009			

2010	秀	山城宗蔭	夜夜にわか肝やねやのともし火と共に焦れとてもゆる計り
2011	佳	當銘朝穎	二人かあととまひるともし火やあらぬはるはると木のま見ゆる
2012	佳	山城宗蔭	うらめしや御門にてらすともし火にしふあとかくす影もない
2013		点者伊江朝眞	稲妻のひかり御門に引きからや里拜むことの自由もならぬ
大正四年九月一八日付「新報」第五四九九号			
日曜会			
2014	当座	点者伊江朝眞	振別れる人もうらめてや呉るな寺ののりやと鐘やつきゆる
	仁	兼島景福	
	義	山城宗得	学ひ屋の文のしたしらへなかは夕間暮の鐘の音のねたさ
2015	礼	山城宗蔭	暁のわかれつけの小枕にひひく開曉鐘の音の恨めしや
2016	智	當銘朝穎	のかす夕間暮やわ肝まてたたく無常の山寺のかねのしもく
2017	信	森田孟徳	徒に遊て今日もまた過ち入相の鐘のわ肝せめて
2018	秀	佐久本孟教	入相のかねやのゆて音高く今日も暮たんでしらち呉ゆか
2019			

2020 秀 山城宗蔭
居もをられらぬ夕間暮の空に山寺の鐘のわ肝つきゆす

2021 佳 比嘉春株
今日の御祝日の御座振のよたしややかて開曉かねの音もちきゆ
ら

2022 佳 稻福全名
時のかねともて聞き流ちいくなひひくことあの世ちかくなれば

2023 点者伊江朝眞
月もいりさかて世の中も静か山寺のかねの音のさやか

大正四年一月二六日付「新報」第五五六三号

日曜会

大正四年十一月廿一日

翁 兼題

点者伊江朝眞

仁

浦添朝長

2024 田舎山国の翁草までも御恵の露に花ゆ咲きやさ

義

兼島景福

2025 肝や春やすか髪や雪つもてをきなんていやりるとしになたさ

礼

高江洲昌壯

2026 頼むしや翁かをにとしなみのよる跡もないらんもとの姿

智

浦添朝宣

2027 ののしはんないらん月花のかけに遊ぶこの翁いつもゐのちや

信

渡慶次朝宣

2028 かしら雪かみておもかゐる大翁身につたるとしやいくつなたか

秀

知念續昌

2029 頭や雪かみてかをやなまさかんあやかやひ見ほしや果報の翁

秀

比嘉春株

2030 子孫そろてうたけしち今宵御恵の御品ほこる翁

佳

親里柿軒

2031 浮世何事も聞ぬ磯端のかもみ友しちゆる海士の翁

佳

伊江朝薫

2032 孫の生ひ立ちの月日よてほこて寄る年も忘る果報の翁

点者伊江朝眞

2033 書物よてまとや魚つやひくらち肝のままあそぶ小田の翁

大正四年一月二九日付「新報」第五五六六号

日曜会

大正四年十一月二十一日

霰

当座

点者伊江朝眞

仁

渡慶次朝宣

2034 庭にくたけゆる音の身にしみてねふる目もさめる夜半の霰

義

屋嘉比政兄

2035 世かほてのしるし庭にさらさらと霰よねちらす音のしほらしや

礼

森田孟徳

2036 糸にぬかれとてぬきとめて見たなさらさらとうてる玉のあられ

智

浦添朝宣

2037 向てくる年もまたよかほさらめ霰ちる玉の色の清らさ

信

知念棚敦

2038 豊かなる御代の世かほしのくとてさらさらと降ゆる玉のあられ

秀

大山朝眞

2039 聞くも淋しさや庭の久場の葉にさらさらとふゆる玉のあられ

秀

名護朝直

2040 見るも嬉しさや米蒔の御庭に米のことつたる玉のあられ

佳

屋嘉比政兄

2041 ふゆる音聞もさむさいやましゆさ風にさそはれる夜半のあられ

佳 渡慶次朝宣

2042 いちやしかな糸口貫留て見ほしやささらさらとちれる玉のあられ

点者伊江朝眞

2043 こからしとつれて降る玉霰砕けゆる音のわ肝しみて

大正四年二月一日付「新報」第五五六八号

三六会

寄日祝 兼題 点者當銘朝頼

高原安光

2044 美代の御光りや天津日のごとに四方にてりのこす隈やないさめ

花城朝忠

2045 昇る日のごとに四方にてりましゆさ仰く我が君の美世のひかり

稻嶺盛治

2046 四方に照りわたる御日の御光や曇りないぬ御世のすかたさらめ

神山處如

2047 隈やないぬ照ゆる天津日のごとに四方に仰かれる御代のうれし

や

高原安光

2048 天津御日嗣の千代八千代願てう御祝しゆる今日や躍て遊は

高原安光

2049 天流日と共にく世いつまでも美代の御さかへやはてしないさ

め

神山處如

2050 天加那志御代やももとはれふわれ照るてたと共に光りましゆさ

花城朝忠

2051 御美のりの今日やてり昇る日もいつよりも勝て光りたちゆさ

点者當銘朝頼

2052 天地と共にさかる日の本の国に生れたる民のうれしや

大正四年二月一日付「新報」第五五八二号

日曜会

新婚祝

伊江朝眞

2053 万世のはしめ鶴も御庭出てうたうたてをとる今日の御祝

伊江朝薫

2054 相生の松の千年あやかやいいもとせの中も栄ていまふれ

龜山朝奉

2055 相生のまつにむすふいと御縁千代かけてさかる初さらめ

渡慶次朝宣

2056 契りいく先や相生のまつのよろつ代と根さす御縁更め

浦添朝宣

2057 御酌とりめしよちいもとせの契りいつも相生の松の栄

比嘉春株

2058 よかる日ゆえらて高砂の松に結てある契りいつもくちゆめ

渡慶次朝宣

2059 根引しち植るふたもとのまつのはやしなることにさかる御縁

高安朝常

2060 いもとせのちきり松ともつるの千代かけて結ぶ御縁ともれ

高安朝常

2061 きやほと嬉さか千代のひめ松の根引しち植る君か御庭

比嘉春株

地方自治研究 第六卷 第三号

2062 契りむすひゆすやひよくをし鳥に寿や千代の松のたとひ

眞壁朝可

2063 尚栄ていまふれ今夜のよかる日に御根引きゆされる君か御宿

大正四年二月一六日付「新報」第五五八三号

日曜会

新婚祝

屋嘉比政兄

2064 けふのよかる日にちきる盃にうれしさや千代の影の見ゆさ

知念棚敦

2065 相生のまつの栄ていくことに万代にさかる糸の御縁

屋嘉比政兄

2066 ちやほと嬉しさか互にくみかはち結ひかためたるけふの御祝

眞壁朝可

2067 根さし定めたる相生の松にちきりしち祝ふ千代の御縁

森田孟徳

2068 嬉しさや今日の御根引の御祝世世に御盛りの初さらめ

森田孟徳

2069 かねも嬉しさめ万代の契り結ひかためたるけふの御祝

知念棚敦

2070 互に水撫て御酌とりめしよち契る糸御縁千代の盛り

高安朝常

2071 月と日のことに替りないんものやよかる日に結ぶ千代の御縁

伊江朝薫

2072 をしとりの御縁あかき縄つなき千代八千代迄も栄ていまふれ

浦添朝宣

2073 あかき縄足に結ぶこの契りいつも相生の松の栄

森田孟徳

2074 御根引の御祝ものにたとられめ手巾前に結てうたや舞かた

阿波根朝祥

2075 糸の縁結ぶさかつきの庭に千代八千代栄るかけの見ゆさ

大正五年一月一四日付「新報」第五六〇九号

日曜会

早梅

天

2076 鶯のなきは色香いや増ら春またぬ咲ちやる梅の一枝

地

2077 み山鶯の忍て来ぬうちに雪のふる枝に梅やさちやさ

人

2078 冬こもりしらぬさき出たる梅の匂ひたつかたや春のここと

日

2079 春にさきたちやい梅のはつ花の二つ三つ咲きも匂のしゆしさ

月

2080 梅のはつ花にこころ引されてくれる年をしもひまもないらん

佳

2081 手植しやる梅の春よまち兼て雪間から咲る花の美さ

佳

2082 我が庭の梅の咲き初てをすかまちかねる春も近くなたら

佳

2083 契る鶯もまたぬ咲き出ため冬くもりしきやる梅のつほめ

佳

2084 冬枯の庭ものとかなてさらめ春の来ぬうちに梅の咲す

佳 伊江朝英

2085 節よ待ち兼て梅や咲ちをんて深山鶯にいやりすらな

点者伊江朝眞

2086 空や雪ふても庭のはつ梅のほひたつかたや春の心地

大正五年一月一五日付「新報」第五六一〇号

日曜会 一月二日

新年言志 兼題 点者伊江朝眞

仁 浦添朝宣

2087 いつよりも今日やこころうきやかゆさみのりすてあとの年の初

め

義 名護朝直

2088 年も立かはてかみや雪つてもいつもつみほしやや千代の若菜

礼 具志頭朝香

2089 こころ若かゆる千代のわか水に老のしからみや立ておかな

智 高安朝常

2090 御恵のつゆに明るこの年もこそのことつつきよかほやらな

信 山田有度

2091 御正月やなだいてかやう月花のかけに歌うたてももち延な

秀 松島朝京

2092 山の井に下りて汲たる若水に肝のちり洗てきよらくならな

秀 兼島景福

2093 たつとしとともこころさし立ててみ代におくれらぬ進ていか

な

佳 岸本賀雅

2094 五六十の年もなたやすく渡てうれしさや今年稀の齢ひ

佳 佐久本孟教

2095 としも重ねたい去年よりも今年月花のかけにゆらて遊は

佳 点者伊江朝眞

2096 初としと供に咲ちやるはるうめの句のことあらな人の心

大正五年二月二三日付「新報」第五六四八号

日曜会 二月廿一日

待不来恋 兼題 点者伊江朝眞

仁 佐久本孟教

2097 西門の鳥井や関の戸もあらぬいつも通路の自由とやすか

義 浦添朝宣

2098 によこぬさめともて山葉さきあすかひきかへち待ゆてにや夜や

明ち

礼 稻福全名

2099 まちもまたれらぬ与所しらぬ中に戻て手枕の夢をかま

智 大山朝眞

2100 鳥うたるまでもあはれまつ下の露にそてのらす恋のつらさ

信 高安朝常

2101 やくそくの今宵鳥声きくまでもおとつれやまつのあらしはかり

秀 龜山朝奉

2102 頼むよもふけてまつにふく風の寒さ身にしみるものくれしや

秀 嵩原安光

2103 まつの戸ゆてらす有明の月に向てはつかしやよた一人

佳 牧志朝佐

2104 有明の月の西りさかるまでも一人松下の露にぬれて

2105 佳 當銘朝穎
待兼る我身のあはれしるものや山端にかかる夜半の御月

2106 点者伊江朝眞
にやこぬさみともてむしか門とさちいもふちうらみことあらは
ちやしゆか

大正五年二月二四日付「新報」第五六四九号

大正五年二月廿日

恋 当座

仁 大宜見朝隆

2107 朝夕浜おりて忘れ貝とても忘ららぬものや恋の思ひ

義 渡嘉敷通昆

2108 摘む人やをらぬあはれ身か肝にもゆる恋草のしけてをても

礼 伊江朝英

2109 梶も取てあもの風ままに流せ思切やひ乗たる恋の小舟

智 森田孟徳

2110 忘れてわすららぬとても捨てららぬ恋し面影や肝にすかて

信 佐久本孟教

2111 君親の為に棄る身とやさかあさましや恋に棄ていちゆさ

秀 高安朝常

2112 思ひ身につつてあはれ口なしのいろ見ちもしらぬ恋しわらへ

秀 高安朝常

2113 しはしものい声や朝夕聞なけな越もこひららぬ義理のまかき

秀 比嘉春株

2114 まれの振合にあかぬふやかれてもとるみちしはの露のしけさ

佳 大山朝眞

2115 いくちやよちや成ても忘ららぬ者や浮世ならわしの恋路さらめ

佳 山城宗徳

2116 あはれむねうちにしける恋草のひきものきららぬつて鳴る

佳 森田孟徳

2117 ままならぬ恋路忘らんてすればあれか面影の我肝しめて

大正五年三月一五日付「新報」第五六六九号

大正五年三月十二日

笠 当座

仁 浦添朝宣

2118 むんちゆるの笠やむたち呉て給ふれもも売になつて忍て拝ま

義 稻福全名

2119 雨ふゆらともてとたるから笠のかほかくち忍ふたよりなたさ

礼 阿波根朝祥

2120 あたに笠かけて物思顔しちゆて船送て戻るはなのわらへ

智 浦添朝宣

2121 むんちゆるの笠やはつてんで童かなしおもかほや肝にとみら

信 屋嘉比政兄

2122 万歳にやつれ親の敵とたせしのふあみ笠のあたるゆへか

秀 大宜見朝隆

2123 いちやし名の朽か笠にかほかくち親のてきとたる人のむかし

佳 阿波根朝祥

2124 手取て引ふしあやむんつゆるの笠になかは顔かくす田舎童

大正五年三月一七日付「新報」第五六七一号

日曜会 三月十二日

鶏

兼題

点者伊江朝眞

仁

大宜味朝隆

2125 朝夕鶏のひなとむつましくいねおちほひろて遊ぶしほらしや

義

浦添朝宣

2126 島もとなとありあけの月にすみて鳴鳥の声のしほらしや

礼

諸見里朝奇

2127 治まるとる美代やつつみ打人もたへて庭鳥のねくらなたさ

智

屋嘉比政兄

2128 ねさめかちなゆる花のならわし口慰みになたさ鳥のはつ声

信

稻福全名

2129 いつも時たかぬ文の窓ちかく呼おこち呉ゆす鳥の情

秀

山城宗蔭

2130 口からも出ちやちひなに物呉ゆる鳥見ちも親のこころしゆさ

秀

眞壁朝可

2131 暁のとりと共に起たちやひ働る人やさかるためし

佳

名護朝直

2132 開鐘ねや寺のあやまりもあすかいつも時たかぬ鳥の啼声

佳

眞喜志康治

2133 闇も雨降りも暁の空に時たかぬなちゆす鶏のまこと

点者伊江朝眞

2134 鳥までもこころへたてらぬゆへに時つけて呉ゆさ隣までも

東風平安信

2135 さやかてる月やあかつきよともてあわてさま四方のとりや鳴ら

大正五年三月二〇日付「新報」第五六七四号

日曜会

具志川朝及君を弔ひて

正四位伊江朝眞

2136 心隔らぬ歌よみの友にいとま乞もすらぬあの世いもうちやめ

稻福全名

2137 ゆらてなかめゆる月花もすてて一人さきなたる君かあはれ

岸本賀雅

2138 月花のかけにあそふたる君の今日やおもかけの目の緒さかて

當銘朝穎

2139 あてなしの孫のおひさきも見たぬのよていないもうちやか蓮の

御台

仲濱政摸

2140 あたら月花もなかめらなこの世捨てて先なたる友とをしさ

山田有度

2141 あの世先なたる友の面影やいつも月花のかけに残て

山城宗得

2142 なみた袖のらち水よまつゆもの草のかけをとて受てたほふれ

與那原良儀

2143 月毎に咲ちゆる言の葉の花も見たないたつらにあの世いもちや

め

屋嘉比政兄

2144 あたら月花もともになかめらぬわかてさきなたる人とあはれ

大宜見朝隆

2145 残る孤子の生立のこことや草葉かけいもちんも守ていまひら

佐久本孟教

2146 嬉し事つく美代のたのしさもふりすてていもうちやめはすの

お台

2147 浦添朝宣
渡り川わたてたと語られかあたらず月花の友もすてて

2148 比嘉賀慶
御祭やしちも月花のかけにうち寄合て今もあそふ心地

2149 龜山朝奉
かひこ素立とて花も与所なしゆる顔と振別のかたみなため

2150 龜山朝奉
いく先や蓮の台やらやすか残て袖ぬらす人やきやしゆか

2151 比嘉春株
やかてさき出る花もなかめらぬ月花の友部すてていまへめ

大正五年五月一九日付「新報」第五七三二号

日曜会 大正五年五月十四日

新樹 兼題

2152 仁 高安朝常
若葉さしそへる庭のかしは木やすたすたと風のやとりところ

2153 義 龜山朝奉
わか夏になてもあつさわしれゆす押風のやとる桐の木かけ

2154 礼 大山朝眞
咲残るはなもちりて根にかへて青葉さしそへる夏になたさ

2155 智 名護朝直
散てあとないらぬ花のおもかけも忘てなかめゆさ庭の若葉

2156 信 屋嘉比政兄
花の咲くころになかめたる桜青葉なてまてもかほるこち

2157 秀 渡慶次朝宣
なかめたるはなの名残ある故か桜木のわか葉にほひたちゆす

2158 兼島景福
春になかめたる花にくらひゆさすたと見ゆる庭の若葉

2159 秀 仲濱政模
咲花にほれて仮ねしやる木蔭わか葉さしそへて分りかねて

大正五年五月二〇日付「新報」第五七三三号

日曜会 大正五年五月十四日

思兩人恋 当座 点者伊江朝眞

2160 仁 伊江朝薫
我か思る二人むつましくせみて二人か手車□乗やひみほしや

2161 義 諸見里朝奇
二人におもわれて片付んならぬ恋のしなさためいきやしなゆか

2162 礼 稻福全名
二つないぬ我身に二人袖引きは涙より外に返事やならぬ

2163 智 屋嘉比政兄
あれや袖とゆひ是やそそひきは誰るにかたつきか我身のこころ

2164 信 眞志喜朝睦
二つないぬわ胸の二人と縁結て波の夜ひるも思ひ増さ

2165 秀 屋嘉比政兄
藤と山吹とわ胸ひきいけはいちやししかたつきかわ身のこころ

2166 秀 高安朝常
二人かしなさけの糸に身かこころつなかれて朝夕おてもつかぬ

2167 秀 点者伊江朝眞
ふたつないんわ身の肝やわけられて品さためくりしや梅と桜

大正五年六月一日付「新報」第五七五五号

友竹亭

山内盛熹先生を弔う

渡久山朝是

かに惜さあるい浮世ものことに抽てたる翁の此世すてて

渡久山朝是

此世はなれても光立増ゆさ抽てたるあとの文にてりて

山城正常

のよしのあとて月花の蔭に思ひ世に残ち急きまふちやか

山城正常

月もみちかける花も咲き落る人の世の中や夢のこころ

山城正常

敷島の道にのこす美光や法の灯火にまさててゆら

金城秀長

四つの旗つれて袞れ門出のなつかしや露の袖としほる

久志安壽

をしみとも又と戻ららぬ道やしりなけな肝のうてもつかぬ

勢理客宗宣

よしまらぬいまひる死出の長御旅哀れちる玉と袖につつむ

勢理客宗宣

我が身導きゆる人も世はすりていきやし此浮世渡て行か

勢理客宗徳

御遺言よやため七日前の御逢合にありし様々のかなし言葉

勢理客宗徳

頼む人やむかしたる列て朝夕三つの糸筋やわかち弾か

勢理客宗徳

惜みかなしでもまたと拜まれ残すい言葉よのりにしやびら

色香まさりたる月花のかけに隠れたる御名のいつし朽ゆか

高良展玉

野村から伝て今に流れゆる糸竹のしらへたかしつきゆか

山城正輔

敷島の道も糸竹の道も広らぬ中にあの世まふちやめ

大正五年六月一五日付「新報」第五七五九号

日曜会 六月十一日

一所恋 兼題 点者伊江朝眞

仁 比嘉春株

袖ひかんすれば義理や肝ひきゆひ袞れ一所に居か苦しや

義 名護朝直

一所にをても人の目のせきに朝夕きしられて自由もならぬ

礼 松島朝京

住み屋とやひとつ朝夕見詰みても思ひ通ゆはしの自由もならぬ

智 名嘉地憲敷

一所にをとして朝夕見つめても思ひかたららぬつくて泣き

信 名嘉地憲敷

一所に居ればあかかゆるためし逆も離れやい人めさけら

秀 佐久本孟敷

朝夕一所に拜かみつめなきな袖ひきもならぬうみの苦しや

秀 當銘朝穎

手折しちむしか音立はきやしゆかたとへましようちのはなややて

む 点者伊江朝眞

2190 壁も耳たいものむしか与所しれて後指さしのあらはちやしゆか

大正五年六月一七日付「新報」第五七六一号

日曜会

大正五年六月十一日

松有佳色

当座

点者伊江朝眞

仁

知念續昌

2191 恵ある露のかかる若松や枝葉から千代のいろのふくて

義

高安朝常

2192 栄ていくやとのまにかかやきゆさくら頭並松の千世のみとり

礼

山城宗得

2193 籬きなて見ゆる西森のまつやいつもよろこひの色ふくて

智

高安朝常

2194 千世のいろふくむとら頭まつ山やさかていくやとの庭となたさ

信

兼島景福

2195 木枯のふきも雪霜のふてもちとせふる松のみとり清さ

秀

知念棚敦

2196 虎頭からつつち西森の松の千代のいろ添へてなたる清さ

秀

浦添朝宣

2197 岩ほたちもてる磯の平松やとしのへることに色とましゆさ

佳

比嘉春株

2198 治とるみよやなみ風もたたんときはなる松のもたへ清さ

佳

比嘉賀慶

2199 二葉萌出るわか庭の小松万代に栄るいろの見ゆさ

点者伊江朝眞

2200 虎頭からつつち西森のまつの色ふくむ君かお宿

大正五年七月一四日付「新報」第五七八八号

日曜会

大正五年七月九日

情

兼題

仁

点者伊江朝眞

2201 与所おみは与所もわんおもて呉ゆさしなさけや人の要めさらめ

義

兼島景福

2202 いやりる一きわや腹立もしやすか今になて知ゆさ友の情

礼

大山朝眞

2203 情けある人の言葉のはなやいつまでもきもに匂ひたちゆさ

智

名護朝直

2204 いちもつくされみ敷島の道に我身みちひきやる人の情

信

伊江島 眞喜志康治

2205 しなさけと頼も浮世やてからと鳥もけたものも人に馴る

秀

兼島景福

2206 此涯にあたて今とおみしゆる世話わけて呉ゆる同志の情

秀

知念政置

2207 一人頼め頼め情しといつもあかぬ交りの道やふぬる

秀

稻福全名

2208 一人助仕情よつくち互に此の浮世わたていかな

佳

名嘉地憲敷

2209 ほとほとになてときもに思しゆる道知らち呉たる人の情

佳

知念棚敦

2210 犬たいんす朝夕養なたる人の情け思知ひなれていちゆさ

佳

知念政直

2211 たるか上になても人の仕情にむかて弓ひちゆる人やをらぬ

点者伊江朝眞

2212 きも持もまこと仕情ゆつくせ浮世こく舟の帆かちてもの

大正五年七月一五日付「新報」第五七八九号

日曜会 大正五年七月九日

馬 当座 点者伊江朝眞

兼島景福

2213 姿からかはてとよむあらひやの馬のはしゆすや飛る心地

義 龜山朝奉

手綱さへひけは重荷持ち運て人たすけなゆる馬やたから

礼 當銘朝顯

世に名たつ馬のかつやしらかけのおもかけやいつもわすれくれ

しや

智 森田孟徳

2216 色色の草の糸につなかれて嬉しやけさ遊ふまちの小馬

信 森田孟徳

飛ふよりもまさて走るあらこまや素立たる主や誰かやよら

秀 渡慶次朝宣

人よりもまさて重荷むちはくふうまや世の中のためから更め

秀 比嘉賀慶

2219 豊むあらひやや馬牧にからてたねゆひろけゆることこのうれしや

佳 大山朝眞

2220 武士の乗ても重荷はくはちも馬や世の中のためからさらめ

佳 當銘朝顯

千里とひはしる馬にうち乗やひ四方の島島もめくて見ほしや

点者伊江朝眞

2222 姿あしなみも余の駒とかはて空かけるたつの種やあらね

大正五年八月二四日付「新報」第五八二八号

大正五年八月

早秋 兼題 点者伊江朝眞

濱川順達

2223 宵の間に秋の立かへてさらめ暁の枕すたくなとす

義 伊江朝英

2224 暁のねさめ涼くなて居すか夢路から秋や廻て来ちやら

礼 伊江朝薫

2225 荻の葉の風にそよく音聞も肝すたくなゆさ秋の初め

智 山城宗蔭

2226 廻て秋くれは思みなしかやゆら三ヶ月の影もかわて見ゆさ

信 龜山朝奉

2227 夏もはり過てにやまた照る月にこころうかれゆる秋になため

秀 松島朝景

2228 野辺の荻の葉の風によられゆる音にしられゆさ秋になたす

秀 伊江朝薫

2229 やかてこの扇子も手はなしゆらやすか真昼の暑さ夏にまさて

佳 渡慶次朝宣

2230 いつのまに秋やにはの垣こへて草にしら露のしけくおきやか

佳 渡慶次朝宣

2231 秋になるまでも一寸もはなさらぬあさゆ手に馴しくはの団扇

点者伊江朝眞

2232 春夏もにや又夢の間にすきて桐の葉の飛る秋になため

大正五年八月二七日付「新報」第五八三二号

日曜会

大正五年八月廿日

古宅萩

当座

点者伊江朝眞

仁

具志頭朝香

たか為に萩のにしきおりなちやかすむ人もをらぬ宿にむかて

義

知念棚敦

萩の花妻の咲ち清さあてとすみ捨し宿もかよてむちやる

礼

龜山朝奉

庭もあれはてて見る人もをらぬかほる秋萩の主やたるか

智

眞志喜朝睦

草も荒れ果てて年やふる宿に誰かために咲ちやか萩の錦

信

稻福全名

すみなれし形見手折しちもとら露かみて咲きやる萩のにしき

秀

具志頭朝香

住人もをらぬやとに打向てたか為におゆか萩のにしき

秀

大山朝眞

誰か宿かやたらありはてる庭に露おけて咲る萩の錦

点者伊江朝眞

むかしすむ人のしなさけのゆへか萩やなままでも榮てをすか

大正五年九月一三日付「新報」第五八四七号

日曜会

大正五年九月十日

雨恋

当座

点者伊江朝眞

仁

渡慶次朝宣

夕間暮とつれて戸はたたく雨やこひの媒かおもひましゆす

義

龜山朝奉

いきやし暮らしゆか夕間暮とつれて肝やあしかちも雨やふゆひ

礼

渡慶次朝宣

そらしらぬ雨にぬれる身かそてやほすかたもならぬ日やてても

智

山城宗蔭

雨ふりの時の小車のほろや与所の目ゆ忍ふたよりなたさ

信

伊江朝薫

田土こす雨にぬれらはんままよ思ひ身に包てをぬのなゆめ

点者伊江朝眞

ふやかれてあとの肝やさみたれの晴る間もないさめ袖の涙

大正五年九月一四日付「新報」第五八四八号

日曜会

大正五年九月十日

尋恋

兼題

点者伊江朝眞

仁

名嘉地憲敷

身にあまる思ひつてつつまらぬ海山も越てとまいて拝ま

義

勢理客宗宣

かくしこと与所にとひ引きもならぬいちやし尋ねよかあれか行

衛

安森盛秀

玉の緒のかきり四方のはてまでも尋ねらな置め無蔵か行衛

智

名護朝直

てたにてりほさり露にそてぬらちとまいりわんをらぬ無蔵か行

衛

山城宗蔭

夜夜に佛の立るかたとめいて行衛しら露にぬれるつらさ

信

山城宗蔭

あけやうこれきやしゆか知る人やをらぬあかぬ別れたる人の行

秀

山城正輔

あけやうこれきやしゆか知る人やをらぬあかぬ別れたる人の行

衛

秀 久志安壽

思ひ身につつていきやし暮されかきやならわん今宵とまいて拝
ま

佳 森田孟徳

尋てもありか行衛知ら露に袖ぬらちもとる夜半のつらさ

佳 高安朝常

夜夜にたつねても行衛しら露にぬれるわか袖やいつかほしゆら

点者伊江朝眞

侘とつれてとまいてきやる島に行衛しら雲のかかるつらさ

大正五年一月三日付「新報」第五八九五号

日曜会

晴天鶴

比嘉次郎

晴れ渡る空に九重の御庭の鶴や千代うたて躍るしほらしや

渡慶次朝宣

雲きりもないらぬ朝日うちむかて鶴も舞ひ遊ぶ今日の御祝

龜山朝奉

澄み渡る空に鶴たいんすをとて□切の御祝するか嬉しや

儀間倫

すみてり渡る空にむら鶴の千代歌て躍るけふのみのり

名嘉地憲敷

澄みわたる空に千代の友鶴の齡我が君にささく嬉しや

比嘉春株

雲きりも晴てすみ渡る空に松にむらたつのなたる清さ

久高唯鄰

晴れ渡る空にかける友鶴や榮て行く美代のしるしさらめ

古堅榮秀

朝日さす山に千世の友鶴もうたうたてあすふけふの御祝

高安朝常

すみ渡るそらに舞遊ぶ鶴の万世の声や四方にひひち

名護朝直

間は嬉しさやはれわたる空に千とせいさなゆる鶴の鳴声

知念績昌

空も澄みわたて千代の友鶴のつはさ波たてて遊ぶしほらしや

岱嶺

雲きりもないらぬ雲井はるはると鶴の一声や千代のひひち

眞喜志朝睦

晴れ渡る空に遊ぶ友鶴の君か千代うたて躍るしほしや

與那原良儀

晴れ渡る空にかけるむらたつの万世の声ものとかさらめ

具志頭朝香

嬉しさやけふの晴れわた□空に千年いさなゆる鶴の鳴声

山城宗蔭

鶴のなく声も澄み渡る空に君か万代の御祝しやへら

伊江朝眞

空もすみ渡りて千代の友つるのうたうたてあそふ春の美山

比嘉賀慶

雲霧もはれて朝日てる空に翔るむら鶴の千代の鳴声

佐久本孟教

鶴たいんす今日や雛よひきつれて澄み渡る空にあすふしほらし

や

2276 花城朝忠
見る程も美さはれわたる空にうきやかやひなたる鶴の一村

浦添朝長

2277 雲きりもないらん晴れ渡るそらに舞ひあそぶ鶴も千代の御祝

知念棚敦

2278 澄みわたる空に朝日打向て飛立る鶴も千代の御祝

吉里眞仁

2279 晴わたる空に千代の友鶴のうたうたてあすふけふのみのり

知念棚敦

2280 澄みわたる空にかけるむら鶴のよろつよの声や四方にひひち

知念政置

2281 空も晴れ渡り嬉しさや鶴の千とせいなゆる声のしほらしや

森田孟徳

2282 美代の御光りとつれて晴渡る空に飛ぶ鶴の声のさやか

長嶺宗恭

2283 はれわたるそらにかける友つるの万世の声や四方にひひち

當銘朝頼

2284 晴れ渡る空に千代のともつるのうれしなく声や四方にひひき

高原安光

2285 澄み渡る空にかけるむらつるの声にいく千代の祝ひふくて

岸本賀雅

2286 澄みわたる空に朝日打向てなきわたるつるのなたる美さ

宜野山朝修

2287 朝日うらうらとてり渡る空に千代こめて鶴の鳴ちゆるしほらし

や

浦添西峯

2288 美代嗣の御子お祝日になればすみ渡る空に鶴や舞かた

屋嘉比政兄

2289 御祝日になれば空も澄み渡りあそぶ友つるの声のしほらしや

兼島景福

2290 雲きりもはれて澄み渡る空に千代よふる鶴の声のさやか

比嘉次郎

2291 朝日さすかけに打向て鶴の千代の声立て躍るしほしや

大正五年一月六日付「新報」第五八九八号

日曜会

山城宗得

2292 空晴てけふや仰く九重に千代の友鶴も躍てあすふ

名嘉地憲敷

2293 御祝日やかはてそらも晴れ渡りなかへ飛ぶ鶴も千代の調

名嘉地憲敷

2294 治まとる御代のしるしさめ鶴も晴渡る空につれて飛ぶさ

浦添西口

2295 空も澄みわたって御祝する今日や数やしらすの千代の鳴声

山城正常

2296 さしのほる旭四方にてり渡りたつの鳴く声も千代のひひち

山城正常

2297 晴れ渡る空にたつの声もすみて御掛ふさい美代や千代に八千代

安盛盛秀

2298 御掛ふさい美代やそらも澄み渡りつるの九口ひにむかてとぶさ

安盛盛秀

曇りないぬ美代の千代の御榮や空に飛たつの声にふくて

渡久山朝是

2300 晴れ渡る空に千代の友つるの御祝日になれはをとる嬉しや

高良睦順

2301 はれ渡る空にあまつ日の美影あふくあしたつの声のしほらしや

渡久山朝是

2302 千代八千代までも□てらす美代や空に飛ふ鶴の声にしりて

勢理客宗宣

2303 雲霧もないらぬすみのふる朝日あふきとふ鶴や千代の羽音

久志安壽

2304 聞は嬉しさをはれ渡る空に千年いさなゆるつるのむる声

久志安壽

2305 雲きりもないらぬ空に舞遊ぶつるの嬉し声や四方にひひち

渡久山朝是

2306 御祝日になれは空はれて鶴の千とし唱る声のしほらしや

高良睦順

2307 はれわたるそらに向て飛鶴の千とし唱ゆる声のしほらしや

賀敷朝睦

2308 はれ渡る空にかけらむらつるの翼なみたてて千代の寄る

高洲昌壯

2309 御祝日になれはつるもひなつれてすみ渡る空に飛る清さ

知念政和

2310 そらはれてたのてらきやかるかたに向て飛渡るつるの美さ

初冬霜 兼題 点者伊江朝眞

仁 比嘉賀慶

2311 初冬になれは野辺の叢の虫の音もかれて霜とおきゆる

義 平敷朝道

2312 月の影ともて戸はあけて見ればはつ冬にふたる霜の光り

礼 浦添西峯

2313 秋やよひの間に過てこからしの紅葉ちり飛ち霜とふゆる

智 山城正常

2314 めくて冬きちやすしらすてやりともて夜明しらしらと霜やふた

信 森田孟徳

2315 庭の草むらにやとる白露のいつの間にむすて霜とふたか

秀 知念棚敦

2316 初冬の空の暁の間に月とおみなしゆさ霜の光り

秀 吉里眞仁

2317 宵の間に冬や音なしに着きやら庭の草の葉に霜のおきやす

秀 渡慶次朝宣

2318 露むすて野辺の草におくしもやわかれたる秋のゆくえさらめ

佳 浦添西峯

2319 暁の夢もさめて庭見ればいつの間に露や霜となたか

佳 龜山朝奉

2320 あかつつの空にこからしとつれてはつ霜の庭にしけく降たさ

点者伊江朝眞

2321 こからしとつれてふたる初霜や弓張の月の光ともて

大正五年十一月七日付「新報」第五八九九号

大正五年十一月三日

大正五年十一月九日付「新報」第五九〇一号

大正五年十一月三日

寄山祝

当座題

点者伊江朝眞

仁

大山朝眞

今日の御祝日や虎頭まつ山の吹過る風も千代のひびき

義

山城宗得

豊むみんなみの山よりも高くおかけほさへ願る今日の嬉しや

礼

龜山朝奉

富士の神山に千代の宿しめるつるたいんす歌で遊ぶ嬉しや

智

稻福全名

ちりひちの積て山となるまでもおかけふさへ美世や嬉しや計り

信

比嘉春株

今日の御祝日や御万人の揃て万世の声や山にひひち

点者伊江朝眞

御祝日になれば空もすみ渡てうきやかゆさ富士の千代の姿

大正五年二月一四日付「新報」第五九三五号

大正五年十二月十日

不被知人恋

兼題

仁

浦添朝長

深山谷底の石清水こころくむ人もをらぬつらさ斗

義

當銘朝頼

深山谷底のおもる木のことに月日たとまでもおもひくたち

礼

勢理客宗宣

浜にふみ残す鳥のあとたよてかよはしゆる心与所のしゆめ

智

名護朝直

葉かくれに咲ちやるはなたいんす露の情けあてふゆる浮世やす

か

信

上江洲由壽

二人が中川や奥山のはなか与所のたかしゆかちれるまでも

秀

吉里眞仁

肝や焦ても知る人やをらぬあけやう行末やいちやかなゆら

秀

徳永盛根

人にしられぬも忍び忍ていつか染なしゆら糸の御縁

佳

龜山朝奉

与所しらぬことにかよはちやる御縁枕より外に誰かすしゆか

佳

岸本賀雅

埋む火のことに朝夕焦りても知る人やをらぬいちやかなゆら

大正五年二月一六日付「新報」第五九三七号

日曜会

大正五年十二月十日

萍 当座

点者伊江朝眞

天

知念棚敦

見れはつれなさや風ままによゆす根なしうき草のこころさらめ

地

大山朝眞

よるへさたまらぬうき草のことに衾れ身かこころおてもつかぬ

人

高安朝常

根なしうき草の池に生しけてつりのなはたらすかたもないらぬ

秀

具志頭朝香

風ままにゆゆる池の浮草やちりひちもつかぬ葉なみ清さ

秀

龜山朝奉

よるへさたまらぬ衾れ浮草のうちゆらりゆらりうてもつかぬ

秀

点者伊江朝眞

2342 うき草のことに西とみは東風ままになゆる人のこころ

大正六年一月二日付「新報」第五九七〇号

日曜会 大正六年一月

新年宴会 当座

天 佐久本孟教

2343 よよる年波もくりもとち互によらてくみかはす今日の宴

地 兼島景福

2344 玉の盃に千代の影うけてくみかはちあそふとしの初

人 花城朝忠

2345 はつとしの宴ひくや三味線に歌ひ舞ひ遊てももちのふさ

秀 稻福全名

2346 年内や鬼の出入の門も松と竹立て祝ひ遊て

佳 比嘉春株

2347 新玉のとしにうたけしち今宵年も肝のこと若くなたさ

大正六年二月一六日付「新報」第五九九五号

日曜会 大正六年二月十一日

待鶯 兼題

仁 岸本賀雅

2348 梅のはつはなやかさしほしやあすかやかて鶯の来鳴くとめは

義 渡慶次朝宣

2349 つほてをる梅もまぢかねてをゆら契る鶯の忍ふはつ声

礼 濱川順達

2350 いつか鶯の谷の戸よ出て千代の初声も聞ち呉ゆら

智 當銘朝頌

2351 待兼るよりかまくら山たかく鶯のはつ声夢に聞ちゆす

信 當銘朝頌

2352 鶯のはつ声聞ほしやゆあてと今日も山宿にとまてをすか

秀 名護朝直

2353 鶯の鳴は山里の友のしらす約束やかねてしやすか

秀 渡慶次朝宣

2354 めくて春くれはいつも待かねる深山鶯の千代のはつ声

佳 渡久山朝是

2355 めくて春なれはいつも待兼や深山鶯の千代の初声

佳 大山朝眞

2356 いつか鶯も古巢たち出て梅かえにやとてふけて呉ゆら

大正六年二月一八日付「新報」第五九九七号

日曜会 二月十一日

寄国祝 当座 点者伊江朝眞

仁 比嘉春株

2357 神代からつつき栄る日の本の国の御光りや四方にてゆさ

義 花城朝忠

2358 御恵の露に日の本の国の民のもも草の栄るうれしや

礼 高安朝常

2359 与所やあらそひの絶間ないんあすか日の本の国やいつも静か

智 比嘉春株

2360 四方の国国をあをく日の本や月と日と共に光り立さ

信 龜山朝奉

2361 外国の人のわんまさひまさひうら安の国の民となゆさ

秀 伊江朝薫

2362

天照す神の御恵の露に幾代いつまでも国や栄る

秀 比嘉賀慶

2363

御慈悲あるゆへに日本の国のとしとくに広くなるか嬉しや

佳 兼島景福

2364

としとしにさかててると共に四方にあふかれる国の光

佳 大山朝眞

2365

神代からつつち治とる国や民も打揃て遊ぶうれしや

点者伊江朝眞

2366

神代から富士の鎮やてからと世世にわか国や栄ていちゆる

大正六年三月一七日付「新報」第六〇二四号

大正六年三月十一日

疑偽恋 兼題

仁 山城正輔

2367

花の身のならいや山吹の花の七重八重咲もさねのなゆみ

義 浦添朝長

2368

里かきもちや朧夜の月かいつもうたかえの雲のかかて

礼 比嘉春株

2369

あまり言との葉の花の色美さむしか偽の種子やあらね

智 勢理客宗宣

2370

玉の緒よかけて契るいこと葉にのよて疑ゆか加那し里前

信 渡久山朝是

2371

朝夕かたたてもしらね我こころいつも花ともておさんめしやい

み

秀 屋嘉宣徳

2372

ことの葉のあまり匂しほらしやあすか一期たのまれる人かやゆ

ら

秀 浦添朝長

2373

いつも実のならぬ山吹の花の色にひかれゆさわ身の心

佳 山城正常

2374

あたら真実もあたになてさらめ里かおさん肝いつものかぬ

佳 比嘉次郎

2375

い言葉の花やしほらし匂あてもむしか併のあらはちやしゆか

大正六年三月一九日付「新報」第六〇二六号

大正六年三月十一日

川春月 当座題

仁 比嘉賀慶

2376

ちりうかふ花の惜さある故と川底に月のやとていまいら

義 比嘉賀慶

2377

青柳の糸につなかれていめみしら瀬走川の月ののみ舟

礼 稻福全名

2378

花のちり飛る走川の水に朧夜の月の影のしほらしや

智 高安朝常

2379

澄てなかれゆる走川の水にやとてなかれらぬ春の御月

信 知念棚敦

2380

豊む那覇川の春の夜の御月詠てもあかぬかけの清さ

大正六年三月二七日付「新報」第六〇三三三号

八重山琉歌会 一月

花下客来 兼題 点者男爵伊江朝眞大人

天 山城宗得

2381 浮世片すみのあはらの庭も花の真盛や客のしけさ
地 山城宗蔭

2382 入替替いまいる我友の絶る間やないさめ花の木蔭
人 新垣隆祥

2383 兄部たもいもちゆいむしろしき童へ庭出て花の蔭に遊は
秀 長濱克高

2384 あや蝶こころ花見しゆる人の入替替暮るまでも
佳 屋嘉宗徳

2385 廻て春くれば花の下蔭にまとぬしち遊ぶ人のしけさ
兼題 点者男爵伊江朝眞大人

2386 琴のねに月も引ゆとめられて山の端の松にかかていまいら
天 屋嘉宗業

2387 日日の営にさわく我肝も静なていきゆさ琴のしらへ
地 長濱眞欣

2388 松に吹く風も静なる夜半の月にすみ渡る琴のしほらしや
人 屋嘉宗業

2389 松に吹く風も静なる夜半の月にすみ渡る琴のしほらしや
秀 山城宗蔭

2390 大正六年三月三〇日付「新報」第六〇三六号
八重山琉歌会 三月

梅初開 兼題 点者伊江朝眞大人

天 山城宗得

打笑て咲る梅のはつ花のしほらし匂ひ袖につつまあまち
地 屋嘉宗業

2391 道急ぐ人も引よとびみゆさ庭に咲出たる梅のほひ
人 長濱眞欣

2392 庭男てんすしらぬ初梅にいちやし鶯のとまいてきちやか
秀 山城宗得

2393 二つ三つ咲る梅の初花の匂や我袖にうつるしほらしや
佳 勢理客知益

2394 あはらの庭も客しけくなゆら打笑て梅の開き初て
兼題 大正六年三月三一日付「新報」第六〇三七号

八重山琉歌会 初逢恋 当座

2395 思ひ身にあまてうき苦しやしやすも夢になち今宵御側よたさ
天 山城宗蔭

2396 たまさかの今宵肝や波たてて拝みつみなきな夢の心地
地 屋嘉宗徳

2397 御側よりつめてこれまでの思ひ語らゆる今宵夢やあらね
人 山城宗蔭

大正六年四月一日付「新報」第六〇三八号

八重山琉歌会 寄島恋 兼題

天 山城宗得

2398 かなし思里か生れ島向ておとつれとまちゆる朝も夕さも
地 長濱眞欣

2399 島のいこと葉の聞違かしちやら約束の今宵いまいもすらぬ
人 長濱克高

2400 与所しらぬ島に遊てむちくらさ浮名たつ浪の立ぬうちに

秀 池城安信

2401 かなし思無蔵か島までもかなしやのちものかれらぬ年やへても

秀 勢理客知益

2402 噂ある間や与所島におとて楽も苦も共にしやへら

佳 山城宗得

2403 まれのおとつれやもたち呉てたほれ衾れ伊計離島にをても

大正六年四月一日付「新報」第六〇四七号

大正六年四月

杖 兼題

2404 ふしにちよこめてむたちある杖ん百の坂までもやすく登ら

仁 花城朝忠

2405 よよるとし波もやすやすとこえてつちもおもしろさあかさ杖ん

義 花城朝忠

2406 いつもつくさりめお慈悲ある君のあつき御恵の鳩の杖ん

礼 龜山朝奉

2407 朝夕さもつくす子孫のまことたしちやより増る杖さらめ

智 山城宗蔭

2408 わらへしよてのたる竹馬とやすか老の坂のほる杖んなたさ

信 眞喜志康治

2409 片手しや杖ん片手しや孫の千代の坂までものほていかな

秀 徳永盛根

2410 ももの坂までもつきもつくれらぬ君の御恵の鳩の杖ん

佳 名護朝直

山城宗輔

2411 若狭大道にのたる竹馬にくりもとちのらな竹の杖ん

佳 濱川順達

2412 千代の坂登る便りなてさらめ朝夕手はなさぬ竹の杖ん

大正六年四月一三日付「新報」第六〇四九号

大正六年四月八日

臨期変約恋 当座

天 龜山朝奉

2413 指よ折かへちまちかねる今宵衾れそら頼めなたる苦しや

地 大山朝眞

2414 約束の今宵里や肝かはてそら頼めしちやすわみのおちと

人 伊江朝薫

2415 兼て約束の御行逢をかむ今宵ぬんて留主とめて戻ち呉ゆか

佳 龜山朝奉

2416 ののよしのあたかけふの日になとてかたく約束も変て呉ゆめ

佳 大山朝眞

2417 兼て約束の言葉のはなも色かはて呉ため無情のわらへ

大正六年四月一五日付「新報」第六〇五一号

八重山琉歌会 三月

待恋 兼題 点者男爵伊江朝眞大人

仁 山城宗蔭

2418 月待んてやり人にいつはたるむくひかや里か影も見らぬ

義 山城宗蔭

2419 里か乗ていまひる車さめとめは門にはい過る音のらめしや

礼 池城安信

2420 まちこかれこかれ今日の夜も更て衾りあかつきの鳥声きちゆさ
智 勢理客知益

2421 指も折りかへし御待しやる今夜あたになて鳥のはつ声きちゆさ
信 屋嘉宗徳

2422 まとる目もすらぬ衾りまつ虫と共に終夜なきよあかち
秀 屋嘉宗徳

2423 にや来ら来らともて衾りまつ葉の露に袖濡らち鳥声きちゆさ
秀 勢理客知益

2424 約束の今夜ねてもねらりらぬ月に打ち向て鳥声きちゆさ
秀 勢理客知益

大正六年四月一六日付「新報」第六〇五二号
八重山琉歌会 三月
機織 当座 点者男爵伊江朝眞大人
天 屋嘉宗徳

2425 玉金御子一人美衣ゆても夜昼もかけて織らななゆめ
地 屋嘉宗徳

2426 誰か宿かやゆら月豊むまでも布織ゆるおとのしけく立す
地 屋嘉宗徳

大正六年四月一七日付「新報」第六〇五三号
八重山琉歌会 三月
山寺花 兼題 点者男爵伊江朝眞大人
仁 山城宗隆

2427 花の白雲に山やつつまれて鐘の音ききと寺やしゆる
義 屋嘉宗業

2428 住む人もをらぬあれる山寺にたかために咲ちやか花の一本
礼 大濱保嘉

2429 花にうかされて山寺に遊て入相のかねのなゆるまでも
智 眞喜屋實茂

2430 花の下蔭に法の師とかたて浮世余所なちやる心地さらめ
信 屋嘉宗徳

2431 雲と思ひなちやさ世のちりも立ぬ内兼久山の寺のさくら
秀 山城宗隆

2432 さけは又ちりる無常のならばしや法の山寺の花にみゆて
秀 新垣隆祥

2433 可惜花やすか山寺に咲けはみる人も居らぬちりるおしき
秀 新垣隆祥

大正六年五月二八日付「新報」第六〇九四号
八重山琉歌会 四月
春雨 兼題 点者男爵伊江朝眞大人
仁 山城宗隆

2434 青柳の糸に貫ちやるしら玉やおとなしに降ゆる雨の雫
義 大濱保嘉

2435 養とるかひこあかりかたやと春雨に濡れて桑やとゆる
礼 山城宗得

2436 春雨の降れば来なくうくひすのふける声もしめる心地さらめ
智 屋嘉宗徳

2437 降ゆる春雨や深山うくひすの散る花おしむ涙やあらね
信 大濱保嘉

2438 春雨に濡れてよかふ歌うたてわん増増田草とゆさ
秀 山城宗隆

2439 朝夕やはやはと降ゆる春雨に庭の若草もみとり増さ
佳 牧志宗保

2440 廻て春來れは雨も時たかぬ豊なる御代のしるしさらめ

大正六年五月二十九日付「新報」第六〇九五号

八重山琉歌会 四月

牛 兼題 点者伊江朝真大人

仁 山城宗蔭

2441 急く故からとつまつきもしゆゆるちさと行く牛の歩みなられ

義 松元維新

2442 去年よりも増てよかる毛作や朝夕素立たる牛のちから

礼 屋嘉宗徳

2443 養ゆる人のし情になれて朝夕働る牛のしほらしや

智 池場安信

2444 田畑たかやちも車ひかさはも人たすけなゆす牛のちから

信 長濱眞欣

2445 駈て先なたる馬も追ひ越よる牛の落付と要目ところ

秀 長濱眞欣

2446 急く程人や落付ななゆめ牛やつまつきのないらん浮世

佳 大濱保嘉

2447 朝夕かなかなと素立ゆる牛に畑鋤ちみゆる今日のうれしや

大正六年五月三〇日付「新報」第六〇九六号

八重山琉歌会 四月

思昔恋 当座 点者伊江朝真大人

仁 東恩納盛珍

2448 月日くり戻ち若くなくて見ほしや通ひ遊ぶたる夢のむかし

義 池城安信

2449 先きなたる無蔵かし情や残て朝夕俵のそてにすかて

礼 譜久山朝弼

2450 昔むつりたる二人と又やすか道行逢は互に見しり兼て

智 山城宗蔭

2451 昔覚出ちと袖やぬらちやすか孫に尋られ返事もならぬ

信 屋嘉宗徳

2452 昔さまさまのあはれしやることも夢になて二人このちやなたさ

秀 屋嘉宗徳

2453 楽も苦も共にしやるむかしこの年になても忘れ苦しや

佳 山城宗得

2454 覚出しとかきり袖に露浮ちゆさあの世さきなたる人のむかし

大正六年六月七日付「新報」第六一〇四号

八重山琉歌会 五月

新樹風 兼題 点者男爵伊江朝真大人

仁 屋嘉宗業

2455 押風の宿る葉桜の蔭や花のころよりも離れ苦しや

義 東恩納盛珍

2456 みとりさしそへる庭のかつまるの下蔭や風のやとひところ

礼 屋嘉宗業

2457 緑さしそへる葉桜の風に夏もよ所なしゆさ離れ座敷

智 山城宗得

2458 花や根にかへる庭の桜木の若葉ふちかへす風の涼しや

信 勢理客知益

2459 昔し我が植たる庭のさくら木の若葉より送る風のすたしや

秀 屋嘉宗業

2460 暑さ忘れゆる翠葉の風やわか袖につつて遊ぶ嬉しや
佳 山城宗蔭

2461 涼た涼たと庭の若葉ふき渡る風の音聞も汗やいゆさ

大正六年六月一日付「新報」第六一〇七号

八重山琉歌会 五月

思二人恋 兼題 点者男爵伊江朝眞大人

仁 山城宗蔭

2462 二人やはなさらぬかすとぬき心染みなちやる縁の深くなたひ

義 山城宗得

2463 いちやしよしあしの色のわかされか深く染みなちやる二人か御

縁

礼 屋嘉宗徳

2464 色わけもないらぬ染なちやる二人か俤や朝夕袖にすかて

智 屋嘉宗業

2465 いちやしかな二人に小車よ引ち恋路むつましく廻て見ほしや

信 屋嘉宗業

2466 ふたつないぬわ身の心別けられてしなきためぐりしや梅と桜

秀 新垣隆祥

2467 思わけもならぬ美衣の袖ころ二人か俤やいつもつれて

秀 屋嘉宗徳

2468 二人供に深くてをるかなよいちやし色わかち染のなゆか

佳 屋嘉宗徳

2469 二人かし情の深さある故と片付もならぬ我肝やきゆる

佳 山城宗得

2470 合せかかみのころさめ二人か俤の肝にうつて

大正六年六月一日付「新報」第六一〇八号

八重山琉歌会 五月

心 当座 点者男爵伊江朝眞大人

仁 勢理客知益

2471 あたてしられゆさ人の志情や上下もないらん誠ひとつ

義 船越牛

2472 おちふれてをても後る指さしゆめ誠一筋のころ持たは

礼 山城宗得

2473 誠一筋にころとんむたは天と地にむかて愧やないらん

智 長濱眞欣

2474 船や棹しちと島の浦やとゆる人の世渡りやころひとつ

信 屋嘉宗徳

2475 錦かさねても木綿つちをても人のよしあしや心さらめ

秀 屋嘉宗業

2476 朝夕おみつめれ只まことひとつものことにうつる心ていもの

秀 山城宗得

2477 春や花詠め秋やもみちかりさまさまにうつる人の心

佳 山城宗得

2478 欲悪のさひのつかぬこと朝夕みかきひからさなわ身の心

佳 屋嘉宗業

2479 常に身か心さひつかぬあれは浮世やすやすとわたて行さ

大正六年六月一四日付「新報」第六一一一号

日曜会 六月

夏魚 兼題 点者伊江朝眞大人

2489 仁 知念政置
池水にうつるてこの紅の花の上にあそぶ魚の清らさ

2488 義 佐久本孟教
はちす葉の下や日の影もいらぬ池に住む鯉のあそびどころ

2487 礼 長嶺宗恭
すたすたと咲きゆるはすの池水にひりふやひ遊ぶ鯉の美さ

2486 智 山田有度
かけうつち見ほしや瀧のしら糸にすたすと登る鯉の姿

2485 信 龜山朝奉
見るもすすしさを水かへてあとの嬉しやけさ遊ぶ池のさんみ

2484 秀 山城正常
水無月のそらに雨風よ起ちたきのほる鯉や龍となゆら

2483 秀 大山朝眞
すたすたと躍る池の魚見ればはし忘れゆさ夏のあつさ

2482 佳 兼島景福
小舟こき出て魚つやいあそは真南風もすたしや安護のうらわ

2481 佳 比嘉賀慶
はれまなくふゆる梅雨の頃や曜て浮かれゆさ池の緋鯉

2480 点者伊江朝眞
夏やてもすたしやひらまつのかげにすすき釣て今日や遊てくら

大正六年六月一六日付「新報」第六一一三三号

日曜会

六月

約雨口恋

兼題

兼島景福

稻福全名

當銘朝顔

高安朝常互撰

2499 仁 大山朝眞
梅雨の雨もいつかはれあかて約束の里か忍ていまいら

2498 義 高安朝常
雨はれていまいる御返事聞からやかきくもり□□□□てふゆ

2497 礼 比嘉賀慶
河にあふれゆる梅雨も晴て約束の里も渡ていまいら

2496 智 岳本岱嶺
里と我か中や天もしりみしやうち約束の今日や晴てたほうり

2495 信 龜山朝奉
五月雨も晴て約束のことに拝て袖ほしゆる節やいつか

2494 秀 高安朝常
あめ晴ていまいす待なかいさあもの女身ややてもお側よらな

2493 秀 佐久本孟教
ささもまと謀て拝みほしやあすかふりまさいまさい思の苦しや

2492 秀 佐久本孟教
只しはしたいんす晴りあがて呉らな約束の今宵詰て置やひ

2491 秀 高江洲昌壯
あかとかから雨にぬれて来られゆめ晴れる日に拝む契りしやひら

大正六年七月一四日付「新報」第六一四一号

日曜会

大正六年七月八日

披書恨恋

兼題

互撰

十点

山城正常

嬉し御状ともてあわてさま見ればうらめしやかはる里か御肝

五点

龜山朝奉

2500 あらさらんことや文にかちたててのよてなさかしゆか与所もあらぬ

五点 高安朝常

秋風のたてはふみのことの葉もふきかへしかへし恨めはかり

五点 名護朝直

肝まゆてさらめ無情の水くきも袖ぬらしなからまたも見ちゆさ

四点 伊集治令

ふみひらき見ればたのであるかなも染なさぬ紺屋とももらめゆる

四点 稻福全名

わ肝なくさめる文さめは秋の霜に色かはる里の言葉

四点 山城正輔

文披ち見ればなととつらめゆるままならぬものど一期ともて

四点 勢理客宗宣

浅間しや心与所に傾きやめ水くちのあとのにこり立ちゆす

四点 伊江朝薫

朝夕待兼る恋の文やすかあけて玉手箱なたるらめしや

大正六年七月一九日付「新報」第六一四六号

日曜会 大正六年七月八日

塵 当座

甲 比嘉賀慶

2508 日日の朝きよめ怠らぬことにちりゆ積らしゆなにや胸の住所

乙 龜山朝奉

2509 塵芥たいんすかたつけておけはあはらやのうちも金の座敷

丙 大山朝眞

2510 塵積てからや山となるためし油断すならへ文の林し

丁 稻福全名

2511 語て呉れ塵のはきためのことに金のつまれゆる島のあらは

戊 龜山朝奉

2512 かねも嬉しさめ上下のまぢりなかくたまたたる塵もはらて

秀 兼島景福

2513 水かけてたいんすしつみほさあすや那覇の道道にたちゆるほこ

秀 兼島景福

2514 油断さんことに朝夕はきすてれつむらせは塵も山となゆる

秀 知念政置

2515 あはらやにをても心きゆみれは身の上にかかる塵やないさめ

秀 長峯宗恭

2516 真簾にいゆる朝日さそかけに見としられゆさちりの浮世

秀 伊志峯禿山

2517 かかるちりはらてよあみしちあとの肝のさやけさやいちんいや

らん

大正六年七月二二日付「新報」第六一四九号

八重山琉歌会 六月

窓前笛 兼題

仁 点者日曜會員互撰 山城宗得

2518 情けないぬ草葉照さよりわ身のふみの上よてらす窓の笛

義 山城宗得

2519 竹の葉にむすふつゆの玉照ちすたと飛るまとのほたる

礼 山城宗蔭

2520 灯火と頼てふみ読たる人のむかし覚出しゆさ窓の螢
山城宗蔭

2521 大人なしくしちゆてみちゆれ思童へいらはとて呉ゆさ窓のほた
る
屋嘉宗徳

2522 いつも山住や来る人もをらぬ窓の螢火と我友しさらめ
信
松元維新

2523 この間から見ゆる星とおみなちやさ庭に飛ひわたるまとのほた
る

大正六年七月二三日付「新報」第六一五〇号

八重山琉歌会 六月

山家橋 兼題 点者日曜會員互選

仁 山城宗得

2524 苔むすふ橋のあとはかりのこてすむ人やをらぬ美代に出て

義 新垣隆祥

2525 深山住む人も便りなてさらめ流木のかかて橋になたす

礼 眞喜屋實茂

2526 丸木橋たよて山住のひとと語らやい心すめていちゆさ

智 松元維新

2527 御慈悲ある美代や谷川よまでも橋かけて渡ることのうれしや

信 勢理客知益

2528 深山住む人も丸木橋わたて押つれて美代に出ていちゆさ

大正六年七月二四日付「新報」第六一五一号

八重山琉歌会 六月

通書窓 当座 点者日曜會員互選

2529 振別て互にな島島をてもふみの通しと御縁さらめ
仁 屋嘉宗徳

2530 袖しほて書ちやる文よおみかけて哀れわか苦しや思てたほふれ
義 眞喜屋實茂

2531 あかたう隔みとて自由ならぬあても文に音信やしらちたほふれ
礼 屋嘉宗徳

2532 女身の慣やおみ焦れしちもいちいやらぬあてと文やあける
智 松元維新

2533 神に願かけてつかてある文のよしあしの御返事待のくりしや
信 山城宗得

2534 思ひ書留に出ちあるふみの玉金返事やいつかとゆら
山城宗蔭

大正六年八月一二日付「新報」第六一六九号

八重山琉歌会 七月 点者男爵伊江朝眞大人

竹間夏月 兼題 長濱克高

2535 窓の中までも竹のかけうつつすたと照ゆる月の清さ
仁 山城宗蔭

2536 すすたと見ゆさ押風になひく竹にゆられゆる月のひかり
義 山城宗蔭

2537 空にさそ竹の打招く故かはやくぬきやかたら今日の御月
礼 大濱保嘉

2538 雲の美衣はつてすすたと月の竹間から出る影の清さ
智 新垣隆祥

信 山城宗得

2539 出てむてわらへ竹の小林にすたすたとかかる月のかかみ

秀 山城宗蔭

2540 すたすたと椽に竹の影うつち枕もとてらす月の清さ

佳 牧志宗保

2541 秋と思みなしゆき雲はりて月の竹間から照す今宵の御月

大正六年八月一五日付「新報」第六一七二号

八重山琉歌会 七月

祈恋 兼題 点者男爵伊江朝眞大人

仁 屋嘉宗徳

2542 哀れわか思ひよ所にいちいやりみ神の引合しと朝夕まぢゆる

義 山城宗得

2543 神にさへわか身すてられかしちやら百夜のりはん御行逢もす

らぬ

礼 池城安信

2544 肝に願立て出立る今宵引合ち給れ恋の御神

智 山城宗得

2545 玉の緒よかけて哀れ夜夜ことにいのるわかおもひあたになゆめ

信 屋嘉宗業

2546 祈てしん立ぬ思み切らなしゆすかいつか引合のあゆらとめは

秀 饒平名其昌

2547 引合ちたほふれ恋の氏神や焦れやせ果て死なんうち

佳 勢理客知益

2548 可惜この世界もふり捨る我身の祈る□一目もむたなやすか

大正六年八月一六日付「新報」第六一七三号

日曜会 八月五日

閑居夜雨 兼題 点者芝圃

仁 翁長良才

2549 夜半にふる雨もすみて音たちゆきこころ住吉の草のいほり

義 仲尾次清孝

2550 浮世はなれたる野辺の草宿や夜半にふる雨の音もしつか

礼 山城正常

2551 野辺の草宿に思ひ有明の月もかきくもて雨のふため

智 山城正輔

2552 浪風の音も聞かぬ山宿の柴の戸はたたき今日夜雨

信 當銘朝穎

2553 夜半にかきならず琴の音とつれてはしよの葉にそそく雨の静

秀 高洲昌壯

2554 世の塵も立ぬしつかなる宿や夜半にふる雨の音も静

秀 翁長良才

2555 夜半にふる雨の音の伽なゆさ浮世はなれたる野辺のいほり

佳 伊集治令

2556 戸はたたき雨の音もききなちやすやすとねむる草のいほり

佳 花城朝忠

2557 世の塵も払て庭の呉竹にふりそそく音の伽になたさ

点者芝圃

2558 浮世かたすみ草の宿までも戸はたたき呉ゆめ無情の夜雨

大正六年八月一七日付「新報」第六一七四号

八重山琉歌会 七月

車上眺望 当座 点者男爵伊江朝眞大人

2559 仁 山城宗蔭
うちかはりかはり詠めてもあかぬ野山越る汽車の窓のけしき

義 屋嘉宗業

2560 小車よとめてなかめてもあかぬ雲にうきあかる沖の小島

礼 屋嘉宗徳

2561 車からおりてのほてむちほしやそらにたち続く富士の高根

智 譜久山朝鼎

2562 車から四方の田畑詠むれば廻てちやみ今年みろく世界報

信 屋嘉宗業

2563 いそく小車もひきととめととめあかぬ詠めゆさ四方の景色

秀 長濱克高

2564 はるはると四方のけしき眺みればゆきはしる車のらんだすか

佳 山城宗得

2565 見はなしの広さなかめほしやあてもめくる小車のととめ苦しや

大正六年八月一九日付「新報」第六一七六号

日曜会 八月十二日

風告秋 当座題 當銘朝額大人撰

仁 鉢嶺清温

2566 萩におとつれる風にしられゆさ千草花咲る秋になとす

義 兼島景福

2567 いな秋になためねさめしちきけは萩にふく風のおとのかはて

礼 高江洲昌壯

2568 秋になてさらめ宵の間の風の松の葉にそよく音のすたしや

智 神山朝奉

2569 木の葉ふきかへす風にしられゆさまちなか秋の廻てつきやす

2570 信 神山朝奉

山のかけたよて遊ふわか袖にやとるすた風や秋のしらせ

秀 具志頭朝香

2571 萩の葉にそよく風の音ききとこよひたちかへる秋やしゆる

秀 翁長良才

2572 庭の竹の葉にそよく風ききもけふからや秋になとすしゆさ

秀 高江洲昌壯

2573 松にふく風の音ききとしゆるあつさふきはらて秋になとす

佳 高江洲昌壯

2574 いつの間に来きやか淋し秋風の松にふき過る音の立ゆす

大正六年九月一四日付「新報」第六二〇一号

大正六年九月九日

初聞虫 兼題 点者伊江朝眞

仁 佐久本孟教

2575 聞人のききは慰もなゆらものゆ思はしゆる虫の初声

義 名嘉地憲敷

2576 山住の習や節入も知らぬ虫の声聞と秋やしゆる

礼 具志頭朝香

2577 聞人やたるも物とおもわしゆら野辺の草むらの虫の初声

智 花城朝忠

2578 嬉しやなつかしやも聞く人によら野辺の草むらの虫の初声

信 屋嘉比政兄

2579 物ゆおもわしゆる秋の夜まもくれに聞もつれなさや虫の初声

秀 比嘉次郎

2580 思ひ焦りとて鳴明す夜半に聞もつれなさや虫の初声

2581 秀 高江洲昌壯
にや又物おみの秋になてさらめ庭の草むらの虫のはつ声

秀 渡慶次朝宣

2582 庭の草むらに虫も鳴きすめてものゆ思もわしゆる秋になため

点者伊江朝眞

2583 逢ぬ戻る夜の野辺の白露にぬれてまつ虫の初声きちやめ

大正六年九月二〇日付「新報」第六二〇七号

大正六年九月九日

寄風恋 当座 点者伊江朝眞

仁 具志頭朝香

2584 風ままになひく花すすきころ与所にひかりるな無蔵か御肝

義 伊江朝薫

2585 風にもまれゆる浮舟のことに我肝夕間暮やうてもつかぬ

礼 伊集治令

2586 真とも押風も吹つみて呉るな無蔵のすて渡る小舟ていもの

智 知念政直

2587 一人ねの空にのゆて吹ちつみてものゆ思はしゆか恋の嵐

信 花城朝忠

2588 肝の門ゆたたく恋のしみ風に涙たまちらす夜半のまくら

点者伊江朝眞

2589 押風になひく青柳のことに朝夕わか心うてもつかぬ

大正六年一〇月一七日付「新報」第六二三三三三号

八重山琉歌会

残暑 兼題

点者男爵伊江朝眞大人

2590 仁 饒平名其昌
稲も刈りとたいてかよおしつれて残るこのあつさ水になかさ

義 山城宗得

2591 走川におりて夏祓らいもしやすかなかさらぬものやあつささら

め 山城宗得

礼 山城宗得

2592 たへかねるあつさ秋までも残ていつからか朝夕新西ふちゆら

智 屋嘉宗徳

2593 秋とてやりいちも蝉の羽衣や打ひろきひろき風よ待ちゆさ

信 山城宗薩

2594 いつからか秋の風も吹おこち節や節のこと涼くなゆら

秀 船越清福

2595 夏過て秋にたちかへてをすか一寸もはなさらぬ久葉の団羽

佳 池城安信

2596 涼し秋んとたるもいちをすか久葉扇子と頼む朝も夕さも

大正六年一〇月二〇日付「新報」第六二三三五号

八重山琉歌研究会

旅泊夢 兼題 点者男爵伊江朝眞大人

仁 山城宗薩

2597 あはれ梶枕故郷の夢も行衛しら浪の音にさめて

義 山城宗薩

2598 梶枕しちゆて風まちゆる今宵夢や先とたさわ浦泊

礼 山城宗得

2599 一人梶枕ゆめに袖ぬらち月にはつかしや旅のとまり

智 池城安信

2600 夢に親御側さめてつれなさゆ舟や漲水の浦にかかて

信 屋嘉宗業

2601 夢に起されてとまあけてみればつれなさやもとの浦の泊

秀 池城安信

2602 風の願立て舟待かしゆゆら夢しけくみゆさ安護の泊

佳 山城宗得

2603 こひし故郷の夢にめはさめて月に袖ぬらす浦の泊

大正六年一〇月二十九日付「新報」

八重山琉歌会 十月

紅葉満山 兼題 点者男爵伊江朝真大人

仁 饒平名其昌

2604 西さかるてたにてらちやかてみゆさ錦そめなちやる山のもみち

義 勢理客知益

2605 深山から端山茜さすことに打むかるかたや紅葉そめて

礼 山城宗蔭

2606 高根から麓もみちはのにしきかさねたる山のいろの美さ

智 屋嘉宗徳

2607 花よりも増てみはたしゆるかきり紅葉はのつつむ山の美さ

信 久英

2608 麓からつつき山のいたたきもみちはのにしき誰す織たか

大正六年一月二日付「新報」第六二四七号

八重山琉歌会 十月

瓢 兼題 点者男爵伊江朝真大人

天 新垣隆祥

2609 こころ慰る友とたのぬすや夜夜にもてあそぶひさこさらめ

地 山城宗蔭

2610 月見にもつれて花見にもつれてはなさらぬ友や瓢さらめ

人 長濱克高

2611 浮世やすやすとくらす身か友や一寸もはなさらぬひさこさらめ

秀 勢理客知益

2612 馴ぬ旅宿の夕間暮のそらの友とたのむすやひさこさらめ

佳 山城宗得

2613 欲悪のさひやあらいなかしなかしこころすみらしゆるわ身の瓢

大正六年一月三日付「新報」第六二四八号

八重山琉歌会 十月

奇名月恋 当座 点者男爵伊江朝真大人

天ノ天

2614 名に立る月も肝にうき雲のかかる夜のそらや伽もならぬ

仁 久英

2615 あれも詠めとて我沙汰しゆらとめは名に立る月も思とましゆる

義 屋嘉宗業

2616 月見なつげやい忍はてやりしちも名に立る今宵人のしけさ

礼 屋嘉宗徳

2617 おみちやきもすらぬ里と詠めてとかわて照りましゆら十五夜御

月

智 勢理客知益

2618 てかよ思童へ浜出て語ら上下も遊ふあきの今宵

信 屋嘉宗業

2619 鳥うたるまでも人しけさあれば自由に忍はらぬ十五夜御月

大正六年十一月八日付「新報」第六二五三号

八重山琉歌会 九月

月下待友 兼題 点者男爵伊江朝真大人

仁 山城宗蔭

約束の友もぬきやかゆる月の時たかぬことに来らなやすか

義 譜久山朝弼

かたふきゆる月も暫し待めしやうり語らゆる友もにやきゆらた

いもの

礼 山城宗得

まつの葉にかかる月のかけまでもわとし待ちかねるこことさら

め

智 屋嘉宗清

名に立る今宵約束の友よまちなから更かす月の惜しさ

信 山城宗蔭

月もぬきやかたひ約束の友に待兼てをんて告れわらへ

2624

2623

2622

2621

2620

大正六年十一月九日付「新報」第六二五四号

八重山琉歌会 九月

頼恋 兼題 点者伊江朝真大人

仁 屋嘉宗業

いことはの色や時の間とやすか一期たのもしや情けはかり

義 眞喜屋實茂

女身のいちやしむかていられゆかたのむなかつちと恋の手引

礼 譜久山朝弼

あの世までかけて契るいことはやいつまでも互に忘てくいるな

2627

2626

2625

2628

智 屋嘉宗徳

楽も苦も御身より外にかたる人やをらぬ胸につつて

信

思み切やひ行る恋のわたり路や情けある風と一期たのむ

大正六年十一月一〇日付「新報」第六二五五号

八重山琉歌会 九月 点者男爵伊江朝真大人

寄船祝 当座 山城宗蔭

かねもうれしさみかれ吉の御船によるこひも共にのせていま

す

義 池城安信

治とる美代やたひの道ひろていつも嘉例吉の音と聞る

礼 山城宗蔭

日数さためとて船の出入も兼てしられゆる美代の嬉しや

智 山城宗得

いつもかりよしや真鱸ふきつめてやすやすと舟のはるか嬉しや

信 屋嘉宗徳

願のこと美風まともふちつめて波路やすやすとはるかうれしや

2634

2633

2632

2631

2630

2629

大正六年十一月五日付「新報」第六二六〇号

日曜会 大正六年十一月

秋唯一日 兼題 点者伊江朝真

仁 與那原良儀

秋のもも草のはなもかれはてて明日からや庭も霜の置ゆら

義 稻福全名

2635

2636

菊の葉にむすぶ露の白玉も明日からや霜のはなとなゆら

礼 大宜味朝隆

秋やとめららねいつよりも今宵かはて鳴く虫の声のしけさ

智 稻嶺盛治

虫の音もよはて干草うら枯れて暮て行今日の秋のをしき

信 渡慶次朝宣

秋てやり言すも今日迄よとめはいちやしかなきもに名残立き

秀 神山朝知

秋や今日かきり別るさめともて鳴るひくらしの声のあはれ

秀 神山朝知

をしむ長月も入相のかねの音つれて今日や別るとめは

佳 伊集治令

七草のはなもひくらしの声もかれはて□明日や冬になゆめ

佳 具志頭朝香

長月といちも名はかりとやゆる夢の間に過て今宵かきり

点者伊江朝眞

手燭とて見なきくも明日からや冬になていろのかはていちゆひ

大正六年十一月一九日付「新報」第六二六四号

日曜会 大正六年十一月

時雨 当座 点者伊江朝眞

仁 龜山朝奉

晴れるさめとめはまたそらや曇てさためかたなさや冬の時雨

義 兼嶋景福

はれるさめとめはまたも打しくれあらてある御衣のほしもならぬ

2646

2645

2644

2643

2642

2641

2640

2639

2638

2637

2636

2647

節や節のことめて冬なれば木の葉うちまきり時雨ふゆさ

智 兼嶋景福

ふれはまたはれて時雨しゆる夜や月もてりくもりさためないさ

め

信 大山朝眞

はれるさめとめはかきこもりこもりさためないんものや冬の時

雨

浮雲とつれて打しくれしくれさためかたなさや冬のみ空

点者伊江朝眞

2650

大正六年十一月二六日付「新報」第六二七〇号

八重山琉歌会 十一月

朝落葉 兼題 点者男爵伊江朝眞大人

天 山城宗蔭

木枯とつれて木の葉ちる庭や朝清めしゆすもひまのかかて

地 勢理客知益

ねくらはなれとて飛ひ立る鳥の羽音にもちりる庭の紅葉

人 屋嘉宗業

とめてとめららぬ可惜もみち葉も暁の鐘とちりていきゆさ

月 山城宗蔭

もみちはゆひろて道油断するな学ひやの時の遅くなゆさ

花 長濱克高

かにもさひしさめ老の朝起の加にしゆる紅葉ちりて飛ふい

2655

2654

2653

2652

2651

2650

2649

2648

2647

大正六年十一月二七日付「新報」第六二七一号

八重山琉歌会 十一月

老恋 兼題 点者男爵伊江朝真大人

仁 屋嘉宗業

2656 年の寄てからや恋の浮橋も思ひつみなけな渡りかねて

義 屋嘉宗徳

2657 年とつれあはん人と笑たすかなとの上になてと恋や知ゆる

礼 屋嘉宗徳

2658 このちやなるまでも音信も聞ぬいちやかなていまいら里か行末

智 勢理客知益

2659 孫つれてをとおまんふりしちやる思みわかちくれやう花の

童へ

信 眞喜屋實茂

2660 孫のかたおそて肝いそく路も立よとてむちゆさ花の童へ

大正六年二月二八日付「新報」第六二七二号

八重山琉歌会 十一月

風 当座 点者男爵伊江朝真大人

天 長濱克高

2661 目にもむたれらぬ手にもとられらぬなひく木の枝と風のすかた

地 山城宗隆

2662 吹たちゆんとめは又しつかなゆひさためかたなさや風のこころ

人 勢理客知益

2663 本帆や帆もたちわたていく舟やいつも嘉例吉の風と頼む

大正六年二月三日付「新報」第六二八七号

日曜会 十二月

遠恋 兼題 点者男爵伊江朝真大人

仁 屋嘉比政兄

2664 おもかけとつれて肝やあしかきもいく先やあかとふ自由もならぬ

義 稻福全名

2665 千里ひたてても縁やひたてたらぬまとるめとかきり夢のしけさ

礼 伊集治令

2666 情けあてからや白雲のかかる山の端もこへていまいらやすか

智 龜山朝奉

2667 おもかけやしけく拜みほしやあても与所島の習や自由もならぬ

信 當銘朝頼

2668 白雲のかかる山の口いんあれば無蔵かしまの浦も見ゆらやすか

秀 浦添朝長

2669 車からたいんすかよひ自由なればのよて朝さ夕さも我肝やちゆか

秀 大山朝真

2670 翅あて自由にとひ渡て見ほしやはるはると見ゆる恋の小島

佳 伊江朝英

2671 あかとひさめれは見る自由もならぬ思ひ小包に包て持たさ

佳 伊集治令

2672 首里と山原の中になりましたて夢も面影も禁止やならぬ

佳 伊集治令

2673 旅にいまいる里に御状もたさとめは思事やあまた筆のたたぬ

追吟 点者芝圃

大正六年二月一九日付「新報」第六二九三号

日曜会 十二月

醜婦 当座題

當銘朝頼大人撰

仁

高江洲昌壯

2674 縁もし情けもいきやしつかれゆかみる方もないらぬ姿たいもの

義

岳本岱嶺

紅や白粉し顔つくりしちも作てあけららぬ無蔵か姿

礼

伊江朝薫

2675 醜女てやりともて麿相に思みなすな肝しかをうたる花のわらへ

智

岳本岱嶺

肝のもてなしや人まさひやすか姿見ちたるも縁やすわぬ

信

高江洲昌壯

2676 人並もないらぬ姿てやりなくな肝し縁むすふ浮世たいもの

秀

兼島景福

2677 姿むちふたるおみわらへやすか肝のし情にかなくなたさ

秀

具志頭朝香

2678 肝美さあれは肝がなくなゆさたとへかをつちやわるさあても

秀

龜山朝奉

2679 かをや見る人にふられやいをてもきものもてなしや梅の匂ひ

佳

兼島景福

2680 肝のもてなしの誠あてさらめみにくちの女さかていきゆす

佳

屋嘉比政兄

2681 女身のならひや肝持とたのむかほ人にかわてわるさあても

大正七年一月一七日付「新報」第六三一九号

八重山琉歌会

十二月

寒松 兼題

点者男爵伊江朝眞大人

仁

山城宗得

2684 雪霜の降てもみとり色そへていつも老松や千代の姿

義

松元維新

2685 木葉枯果る節にまたなても庭の平松や色の美さ

礼

船越清福

2686 うち向るかたや木葉冬枯て緑葉や松に残るはかり

智

勢理客知益

2687 深山から端山冬かれになてもいつも色清さ庭の小松

信

伊野波清益

2688 霜枯の中に立ち出て見ゆる常盤なる松の□□い美□

秀

伊野波清益

2689 いかな雪霜につめられやしちもかはるいろないさめ松の姿

秀

山城宗得

2690 間はきく程に寒さいやましゆさ高根ふきおろす松の嵐

佳

屋嘉宗徳

2691 誰もおみかけれ冬枯も知らぬ雪霜に驕る松の操

大正七年一月一八日付「新報」第六三二〇号

八重山琉歌会

□二月

社頭水 兼題 点者男爵伊江朝眞大人

仁

長嶺克高

2692 神の御つかひの御流れかやゆら玉のこと澄る水の鏡

仁

屋嘉宗業

2693 神の御姿も拝まれるこち豊む御手洗の水のかかみ

義

山城宗得

2694 神の御姿も拝まれる心地底までも澄る水の鏡

礼

船越清福

2695 真心になたさ御手洗の水に肝のさひまでも洗ひ流ち
勢理客知益 智

2696 朝毎に神も御つかひかみせらかはて御手洗の水や澄て
長濱克高 信

2697 肝心までも清くなていきゆさ御手洗の川の流れ吸は
勢理客知益 秀

2698 神の御姿も拝まれるこち御手洗の水にかけの移て
山城宗得 秀

2699 普天間川に下りてきよめさんうちに肝心までも澄て行き
山城宗得 佳

2700 御手洗の水に心清めれば美くなて見ゆさなどの影も
與世山慶昌 佳

大正七年一月一九日付「新報」第六三二二号

八重山琉歌会 十二月

歳暮恋 当座 点者男爵伊江朝眞大人選
屋嘉宗業 仁

2701 暮ちちやるとしの世話もよろこひも一人語り語り春よ待さ
屋嘉宗業 義

2702 胸の憂雲も互にうちはらてはれはれと年も暮ち行き
山城宗蔭 礼

2703 波かはしかはし年や忘れてもわすららぬものや胸の思ひ
屋嘉宗徳 智

2704 にやまた此の年も暮れ果て行きいつまでも思ひ胸につつて
山城宗得 信

2705 衾れさまさまの胸うちの思ひいらないたつらに年も暮て
祝嶺春安 秀

2706 待兼るうちに月も日も過て暮る年波に我袖ぬらち
山城宗蔭 秀

2707 月日つて年や暮果て行い思ひつみ重ていちやかなゆら
長濱克高 佳

2708 唯ないちやうん我身や年に振れゆす又も年波の寄るらめしや
大正七年一月二〇日付「新報」第六三二二号
日曜会 大正七年一月 兼題 点者伊江朝眞

新年酒 兼題 点者伊江朝眞
山城宗蔭 仁

2709 くみかはす屠蘇に老が身の肝も花咲ちゆる春になたる心地
比嘉賀慶 義

2710 せわに閉詰みる肝の門もひらき打誇て酌る屠蘇の御酒
糸満朝美 礼

2711 くみかはす酒にことの葉の花も千代の匂立さ年のはしめ
岳本岱嶺 智

2712 千代の数とゆる新玉の年や酌みかわす酒の果もないらん
長嶺宗恭 信

2713 初年の今日やあをく我君の幾千年願て酌かうれしや
糸満朝 秀

2714 □□□今日や心新玉の年迎てくぬさ屠蘇の御酒
大宜味朝隆 秀

2715 かはす盃にうつる我か顔の若くなて見ゆさとしのはしめ
佐久本孟教 国

2716 南の山のことほぎのことに願て酌みかはす年のはしめ
佐久本孟教 国

2717

浮世立ちさわく年暮の世話もくち喜の屠蘇もくぬさ

点者伊江朝眞

2718

歌のとしいちちやて互に千代ねかてくみかはす屠蘇の数やしらぬ

大正七年一月二日付「新報」第六三二四号

日曜会

大正七年一月十三日

梅花先春

当座

点者伊江朝眞

仁

知念政置

2719

いつの間に咲きやがとしの中垣に春またぬ梅の匂ひたちゆす

義

稻福全名

2720

木草かれはてる冬もしら梅の春ゆまちかほに笑て咲さ

礼

稻福全名

2721

南さす枝に咲き初る梅やとなりまてつきやる春のしるし

智

宮城助政

2722

冬こもりすらぬさき出たる梅や花もいろ美さ匂もしほらしや

信

兼嶋景福

2723

雪にまきれてもかくれないんものや春またぬさきやる梅の一枝

秀

高安朝常

2724

さき美さあもの床かさり召れ冬こもりすらぬ梅の一枝

秀

花城朝忠

2725

春の音信も先ぎちやめ梅の雪間からしゆらし匂の立す

佳

龜山朝奉

2726

雪のふるとしの春たたぬうちに南さす枝に梅のさちやさ

点者伊江朝眞

2727

中垣の梅のさきそめてをすか隣まで春のめくてきちやめ

大正七年二月五日付「新報」第六三三八号

八重山琉歌研究会

伊江男爵氏還暦の賀に寄真祝といふことを

譜久山朝弼

2728

まこと御栄へのしるしさめ子孫そろて寿の御祝めさいす

山城宗得

2729

のほて行く真道ふみたかんことに千代の坂までも御供をかま

長濱克高

2730

歌のふしふしに真こころよこめてうたて百年の御願しやへら

牧志宗保

2731

まこと寿のしるしさめまつの緑子の千歳あやかひめしやうち

新垣隆祥

2732

祝あけるうたにまこころよこめて君か寿の御願しやへら

屋嘉宗徳

2733

緑子のむかしくり返しめしやうち真道ふていまいら千代のさか

も

伊野波盛益

2734

浮世上下もまことあるひとや寿や子孫さかるうれしや

山城宗隆

2735

寿や子孫とひ位もうちやてまこと御栄への御祝さらめ

船越清福

2736

拝て嬉しさや実まことつくす子は孫前なち御祝めさいす

松元維新

2737

肝真つくす子は孫つれて御誇らしやめさいら今日の御祝

勢理客知益

2738

まことうれしさや朝日さすことにさかて寿の御祝めさいす

2739 千代のいろよくて福寿草もひらきまこと寿のしるしさらめ
屋嘉宗業

2740 子や孫揃てまこと御栄への寿の御祝あやかひしやへら
比嘉統亨

大正七年二月二六日付「新報」第六三五八号

八重山琉歌会 一月

新年言志 兼題 点者男爵伊江朝真大人

2741 世話ことも歳とともにあらたまてあかひてたころさかていか
勢理客知益

な 義 山城宗隆

2742 行廻り廻り新玉のとしのうれしことはかり一期あらな
礼 勢理客知益

2743 新玉のとしと共にたちかはてうれしことはかりあらなやすか
智 長濱克高

2744 いつも新玉のとしのこと寄合てころはれはれと遊びふしやの
信 山城宗隆

2745 はつとしとつれて敷島の道の奥よふみわけていらなやすか
秀 屋嘉宗業

2746 新玉のとしに親のうれしかほ拝てうれしさやいちもいやらぬ
佳 屋嘉宗徳

2747 今日や小松引き明日や若菜つていつも春のこと暮ちみほしや

大正七年二月二七日付「新報」第六三五九号

八重山琉歌会 二月

2748 恋妨学問 兼題 点者男爵伊江朝真大人

天 長濱克高

2749 虫のやとしちやる文むちと恋にふみ迷てをたる科やしゆる
地 山城宗隆

2750 いちやしふみ□□て真路尋ねゆか恋のくらやみにわ肝迷て
人 祝嶺春安

学はてやいすれは一寸も片時も打むかるかたや無蔵か姿

大正七年二月二七日付「新報」第六三五九号

八重山琉歌会 二月

農 当座 点者男爵伊江朝真大人

仁 勢理客知益

2751 朝夕汗なち耕やしゆる人や十尋屋も作てさかるためし
義 山城宗隆

2752 油断さんことに田畑耕すやう島国よとますもとひたいもの
礼 長濱克高

2753 苦のあとや楽のもとても朝夕てはなすな歎とすきと
智 山城宗隆

2754 玉の汗なち田畑耕すは五こく毛作のさかるためし
信 勢理客知益

2755 油断さんことに朝夕耕はおのか身もゆたか国もゆたか
秀 山城宗隆

2756 田畑耕やちる民のいさをしやみのる稲のほのいろにみゆさ
佳 清益

2757 男から女世果報いさなとて田畑たかやしゆる歌のしほらしや

大正七年二月二八日付「新報」第六三六〇号

八重山琉歌会 二月

鶯 兼題 点者男爵伊江朝真大人

仁 屋嘉宗業

2758 約束かやたら梅も咲き初めて深山うくひすの今朝のはつ声

義 勢理客知益

2759 ねくらはなれとてふける鶯の声にあかつきの夢もさめて

礼 船越清福

2760 うれしやけさほける深山うくひすの声に初春の夢もさめて

智 清益

2761 間もうれしさや待兼てをたる深山うくひすの今朝のはつ声

信 久英

2762 庭に咲く梅のはなやちらすともやとる鶯の禁止のなゆみ

秀 屋嘉宗業

2763 明雲とつれて深山うくひすの春ゆ音信のしほらしや

佳 山城宗蔭

2764 やとる鶯のおとろちゆらたいもの梅のかけからやとけれ童へ

大正七年三月一日付「新報」第六三六一号

日曜会 大正七年二月

霞始聳 兼題 男爵伊江朝真大人撰

仁 當銘朝顯

2765 明雲とつれてかすみさきたてて待兼る春やめくてきちやめ

義 伊集治令

2766 賤か炭かまのけふりさめとめは山にたち初るはるのかすみ

礼 比嘉次郎

2767

野辺に初霞たなひちゆす見ちと春やおとなしにめくてきちやさ

智 岳本岱嶺

2768 朝起て見れば霞たちそめてやかて鶯の初声きちゆら

信 山城宗蔭

2769 花のおもかけも立増てさらめにほひ初めたさ山の霞

秀 安森盛秀

2770 立よとて見ればうつし絵のことに霞たちそめる津堅久高

秀 龜山朝奉

2771 かねておもひねの夢やまたあらねはなのいろそへる春の霞

佳 比嘉賀慶

2772 深山うくひすのはつ声と共にかすみたちそめる梅のはやし

佳 高江洲昌壯

2773 残るしら雪も春風にとけてかすみ立そめる野辺も山も

追吟 撰者芝圃

2774 知念さきなかひうす霞たちゆすひかしから春のきちやるし

大正七年三月三日付「新報」第六三六三号

八重山琉歌会 二月

述口 兼題 点者男爵伊江朝真大人

仁 松元維新

2775 浮世人並に渡らてやりとむて朝夕はたらちも自由もならぬ

義 屋嘉宗徳

2776 埋火と共にうつむれてをてもかき起ち呉ゆる人もをらぬ

礼 新垣隆祥

2777 可惜しか浮世いたつらに暮ち恨みてもちやしゆか我身のしわさ

智 屋嘉宗業

2778 一事さへ世界にためなゆることもなさなこの歳になたるらめし
や

信 譜久山朝弼

2779 浮世ものことも与所になち我身のやすやすとこの世渡りほしや
の

大正七年三月四日付「新報」第六三六四号

日曜会 大正七年二月

寄石恋 当座題 男爵伊江朝眞大人撰

仁 泉缸

2780 いはほつらぬちゆる矢もあるためしおもて自由ならぬ事やない
さめ

義 花城朝忠

2781 忘れてやりともて石名子ゆとれはとれはとることにのみとまし
ゆる

礼 高安朝常

2782 お側よりつめて無蔵と石名子のすさひしち御縁むすひほしやの
智 龜山朝奉

2783 身にあまるおもひ忘ららぬあてと石名子のいしもにや又とたる
信 高安朝常

2784 沖の石ころあらはれて呉らなみすにかくれたる無蔵かすかた
秀 高江洲昌壯

2785 深山谷底にうつまれる石か月日へるまでも思ひくたち
佳 伊江朝薫

2786 石名子の石ゆひろて遊ぶたるかなし思無蔵や忘れくりしや
追吟 撰者芝圃

2787 いしたいんすうては音立ちゆる浮世音立ぬおちゆめ二人か中の

大正七年三月五日付「新報」第六三六五号

八重山琉歌会 二月 点者男爵伊江朝眞大人
不言恋 当座 屋嘉宗徳

2788 あげやう我が思ひ埋火のこち知る人やをらぬもゆるはかり
義 屋嘉宗業

2789 若かいち浮名立かしゆらともて朝夕さも思ひ胸にくたち
礼 新垣隆祥

2790 たとひい言葉の花やないぬあても引目しゆすみて我肝しらね
智 山城宗得

2791 いちも出さらぬ衾れわか肝や埋火のことにやきて行き
信 松元維新

2792 衾れこのままに朽ち果ていちゆらいちも出さらぬわ身のおもひ

大正七年三月二六日付「新報」第六三八五号

日曜会 大正七年三月十七日 点者伊江朝眞
苦学 兼題 山城宗隆

2793 我身もまた乗ゆる節のないん置めふみ学ふためにひちやる車
仁 當銘朝頼

2794 夜や小車のあと押てかしち文まなふわらへ人のかかみ
礼 名護朝直

2795 夜や小車のひき子なてたいんす花さかちみほしや文のはやし
智 湖城恵宏

2796 文照ち読る燭もないらぬ雪と螢の影とたのむ
信 大宜見朝隆

2797 薪木取てまとや螢火ゆたよてふみわけて行さ文の林
秀 名嘉地憲敷

2798 なつは螢火に冬はつむ雪に文てらち読ぬす世に名残す
秀 稻嶺盛治

2799 きり股にたてて苦りしやしちからと一期たのしみの路に入ゆる
佳 佐久本孟教

2800 ひとかたに向て文学て見ほしや日日の営の世話もゆるち
佳 徳永盛根

2801 薪木とてひまや文ゆ手離しゆな苦や暫し楽くややかて
点者伊江朝眞

2802 夜明しらしらと文うての後や書物てはなさぬかなしわらへ
大正七年三月二八日付「新報」第六三八七号
日曜会 大正七年三月十七日

2803 樵夫 当座 点者伊江朝眞
仁 具志頭朝香

2804 恵ある美代やつまきとる人の斧の音たんすのとかなゆさ
義 具志頭朝香

2805 たはてある柴に花も折そへてかへる山人の歌のしほらしや
礼 知念政置

2806 うかとしちむとな浮世ものことも忘て柴とゆる人の心
智 伊集治令

お恵の露に山の木も繁て薪木とる人のらくになたさ
信 高江洲昌壯

2807 薪木とりしちもこころあり明の月のかけふてと戻る嬉しや
秀 稻福全名

2808 柴の荷もおるちしはし月またな行先もみらぬ山路ていもの
秀 翁長良才

2809 薪木とてくらすつれなさもすていつかたのしぬる時になゆか
佳 花城朝忠

2810 雨のふて晴て薪木とる業の若しやかを親のしらぬことに
点者伊江朝眞

2811 柴に折そへるはなの一枝のうしさしちはひる肩にとまて
大正七年四月一日付「新報」第六三九一号
八重山琉歌会 二月

2812 夢中逢恋 兼題 点者伊江朝眞大人
仁 山城宗蔭

2813 手枕の夢のまことなていつか朝夕さも里の御側よよら
義 山城宗得

2814 手枕の夢のさめて今までも花のうつり香の袖に残て
礼 牧志宗保

2815 昔し馴そめの肝や今までも夢路からかよて御側拜て
智 大嶺信秀

2816 積る我思ひ語らたる夢のさめてつれなさや旅の宿り
信 屋嘉宗徳

2817 呼ひ起ち呉たる夢と恨みゆるさめてあと姿たかけも見らぬ
大正七年四月三日付「新報」第六三九三三号
八重山琉歌会 二月

浦舟 当座 点者伊江朝真大人

天 屋嘉宗徳

2817 照る月も清て浪の声もたたため遊てうきやかゆる那覇の港

地 長濱克高

2818 浦浪もたたぬさやか照る月に海士の釣舟のなたる清さ

人 勢理客知益

2819 まとも押風に浦の釣舟の白帆はらまちゆてはるか清さ

大正七年四月二四日付「新報」第六四一三号

日曜会 四月

少女携桜 兼題 伊江朝真大人撰

仁 徳永盛根

2820 はなの一枝もおしさあみはへるもちやるみやらへにかかりしか

り

義 神山朝知

2821 かささてやりともて手折しやみわらへあんきよらさ咲る花の一

枝

礼 當銘朝頼

2822 しゆらし思わらへいけてななめゆみはな見からつとの花のちゆ

えた

智 高江洲昌壯

2823 手に持る花のうつり香かやゆらおとめらか袖の匂のしほらしや

信 湖城恵宏

2824 うつくしやわらへさきかけるさくらかさしほしやあてと一枝と

ため

秀 高安朝常

2825 花のおとめらのかほに口きやかやひをられたるさくらいろ香増

ゆさ

秀 岳本岱嶺

2826 さくら手に持ちてしなくらひしちゆて遊ふ少女んちやかかほの

美さ

佳

2827 薪とて戻るはなの思わらへ手に持ちやる花や誰に呉ゆか

佳

2828 明日や活花のおけいこのあゆみ桜折てもとる花のわらへ

追吟 芝圃

2829 小金井のみやけ学屋の友にかさちむち見せら花の一枝

大正七年四月二五日付「新報」第六四一四号

八重山琉歌会 四月

市 兼題 点者男爵伊江朝真大人

仁 清益

2830 豊なる美代のしるしさめ市の日に売り買ひのしけくなゆす

義 勢理客知益

2831 豊なる美代や市見ちとしゆる四方の国国の品も揃て

礼 山城宗得

2832 御世のおさかりや市見ちとしゆき売り買ひの品の年に増て

智 牧志宗保

2833 日に持寄る品物も揃てとしことにさかる那覇の市場

信 山城宗得

2834 市の売り買ひもとしことにさかてひらけゆく美代のしるしさら

め

大正七年四月二七日付「新報」第六四一六号

八重山琉歌会 四月

若草 兼題 点者男爵伊江朝眞大人

仁 勢理客知益

2835 降る春雨に緑りさしそへて萌出る草のいろの美さ

義 山城宗蔭

2836 老が身の肝も若くなすものや庭の若草の緑りさらめ

礼 山城宗得

2837 雪にうつむたる庭のもも草の若葉もえ出る色の美さ

智 長濱克高

2838 うつむれておたる雪の下草も緑りさしそへる春になたさ

信 屋嘉宗業

2839 てかやう思童へ春の百草の緑りさす野辺に出て遊は

秀 新垣隆祥

2840 春風になひく野辺の若草や治とる御代の民の姿

山城宗得

2841 心あて童へふみあらち呉るな美さ萌出る芝の緑り

佳 牧志宗保

2842 あかぬ詠ゆさ野辺のもも草の春風になひくいろの清さ

清益

2843 野辺の百草もみとりさしそへて心うちやかゆさ春の空や

大正七年四月二九日付「新報」第六四一八号

日曜会 四月

松間藤 当座題 男爵伊江朝眞大人撰

2844 春の山まつのえたに咲きかかる藤浪のはなや千代のいろ香

仁 當銘朝顯

2845 常盤なる松の枝にまつふたる藤浪の花のいろの美さ

義 比嘉賀恭

2846 雲とおみなしゆさ峰の高松にかかる藤浪の花の盛り

礼 比嘉賀恭

2847 花やちりはててにや又藤浪の松と縁むすて咲る美さ

智 高江洲昌壯

2848 庭の松か枝にかかる藤浪の池にかけうつち咲る清さ

信 高江洲昌壯

2849 松のみとり葉にさきかかる藤の花の紫のいろのしゆしや

秀 兼島景福

2850 庭の老松もわかくなて見ゆさ藤の紫の花ゆかみて

佳 兼島景福

2851 ひらまつにかかる藤浪のはなもときはなるいろの含てみゆさ

追吟 芝圃